
あの日見上げた青空に

池崎 数也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの日見上げた青空に

【Nコード】

N4849B

【作者名】

池崎 数也

【あらすじ】

高校二年の夏休み。田舎の祖母が営む農業の手伝いに駆り出されることになった藤倉鷹志。だが、祖母の家に行く途中で行き倒れてしまう。そんな中、通りかかる一台の車。そして、鷹志は一人の少女と出会う。あらすじと言うほどではないですが、一章は田舎を舞台にした物語で、二章は学校生活を舞台にした物語になる予定です。時にシリアスに、時にコメディーに描きたいと思っています。

第一話 夏の小道

視界が揺れる。

目の前の光景がぐにやりと歪み、後方へと流れていく。

ああ、もう駄目だ。

俺は腹部に感じる不快感に、眉を寄せた。

ゆっくりと、傾いていく体は止めようもない。

何とか体を捻ってみるが、うつ伏せが仰向けに変わった程度の差。

そのまま、スローモーションに流れていく時間の中で、俺は自身の不遇を嘆いた。

なんでこんな場所で。

そんな言葉が頭を掠めたが、すでに頭は働くことを放棄している。

吸い込まれるように地面へと倒れこみ、全身に感じた痛みに息を漏らした。

「くそ……」

小さく悪態をついてみるが、如何ほどの意味もない。
それでも俺は再度悪態をつこうとして、

ぐぐう。

「……腹、減った」

腹部から聞こえた音で、悪態は愚痴へと変わった。

事の発端は二日前。

田舎に住んでいる婆ちゃんからの電話が始まりだった。

年に一度か二度、こっちの方に出てくる婆ちゃんだが、今回は違う用向き。

営んでいる農業が少し大変で、人手が欲しいと、そう言われた。

電話に出たのがお袋で、何で俺にその話を振るのか疑問に思ったときには既に遅い。

「ということで、よろしくね鷹志」

「はい？」

それが、俺にかけられた言葉だと理解するのに数秒を要した。そして俺は、フリーズから立ち直るとお袋に詰め寄る。

「ちょ、何で俺なんだよ。お袋か親父が行けば良いだろ？」

「いいじゃない。どうせ学校も夏休みだし、アンタ暇でしょ？ わたしや父さんはね、学生さんが夏休みでゴロゴロしていても仕事があるのよ。それに、どうせ二週間ぐらいなら大丈夫でしょ」

「いや、だからそのゴロゴロをしたいんだけど」

折角の夏休みを、何故農業に費やさなければいけないだろう？

そんなことを思いつつ、俺は何とか飛ばされる白羽の矢を避ける。だが、お袋は聞く耳を持ってくれない。

「そんな勿体ないことするんじゃないの。ゴロゴロするだけなんて無駄じゃない。だったら、お婆ちゃんところで汗を流してきなさい」

「いやいや、その無駄を満喫するのが良いんじゃないですか」

なおも食い下がる俺を見て、お袋はふっとため息を吐く。

諦めたか？ と俺が思った瞬間、お袋は切り札を使ってきた。

「そう…残念ね。お婆ちゃん、バイト代を出すからって言ってたのに……」

小さく、俺に聞こえるか聞こえないかの声量で呟かれたその一言は、俺の中の天秤を傾かせる。

「バイト代って……いくら？」

それ次第ではOKですよ、という雰囲気を出しながら尋ねる俺。そんな俺を見ながらお袋は小さく笑みを浮かべ、開いた掌を俺に見せた。

「五万円」

「行きますよう」

即答。

これ以上ないくらい、完璧で、完全な即答だった。

「そう、じゃあ明後日から行ってもらえる？」

「了解です母上」

気分的に敬礼をしながら俺は返答する。

まだまだ夏休みは始まったばかりだし、そのバイト代で残った日々を遊び倒すのも良いだろう。

そんなことを考えつつ、そのときは納得していた。

「ちくしょう……まさかスタートから躓くとは」

蝉が大合唱をする中、俺はそこまで整備のされていない地面に寝転んだままで呟く。

見上げた空には一片の雲すらなく、容赦ない照り付けをそのまま地上に送り届けてくれる。

まあなんだ。

一言で言うと、この上なく暑い。

太陽の熱線は遠慮なく地面を暖め、殺人的な熱さになっている。周りの田んぼに植えられた稲の穂を風が揺らすが、風は風でも熱風。

夏場は地面が一番暑いと聞いたことがあるが、実際かなり暑かった。

遠くを見れば、陽炎どころか塵気楼すら見えるかもしれない。

背中が焼けそうだけれど、腹が減って動く体力もない。ついでに言えば、食べ物もなく飲み物もない。

お金はあるが食料が買えないという、一種のサバイバル染みた現実実に苦笑を浮かべた。

ポケットに入っている携帯も、見事に圏外を示している。

「くそ。自動販売機どころか電柱一本ない道がこの日本にあったなんてー！」

叫ぶ。

電柱一本ない道自体は珍しくない。ただ、一面に広がる光景が田んぼだけで民家もないという状況が精神を追いつめてくれた。

俺はポケットに手を入れ、やや折れ曲がった紙を取り出す。

婆ちゃんの家に行くための地図……のはずのソレは、何の恨みがあるのか、俺をこんな場所に案内してくれた。

「いや、恨みがあるのはお袋？」

地図を書いたのはお袋だ。ならば、お袋が俺に恨みを持っている？
暑さのせいかな、はたまた空腹のせいかな。

破綻した思考はそんな被害妄想じみたことをつらつらと考え出す。
考えている暇があったら先に進むべきだと思うが、行く道も来た
道も、共に先が見えない。

「大体、駅の場所が間違ってるって……」

自分が降りた駅を思い返して嘆息する。

寂れに寂れたその駅は、無人だった。駅員もおらず、あるのはボ
ロボロの建物一つ。

周りには店どころか建物もなく、一瞬違う世界にたどり着いたの
かと冷や汗を流した。

それなりに田舎だとは聞いていたが、まさかここまで田舎だった
とは誰も思っまい。

そもそも、電車に乗っていたのが俺一人という時点で考えるべき
だった。

電車を運転していた運転手が、駅で降りる俺を見て不思議そうな
目をしていたのも疑問に残る。

そして最大の疑問は、

「どこが駅から徒歩十分でたどり着けるっつーんじゃない！」

紙に書いてある、婆ちゃんの家までの道のり。

駅を出て、真っ直ぐに、徒歩で十分も歩けばわかる。

そう書いてあるというのに、二時間歩いた今現在でも着く様子
がない。

田園風景広がる一本道を歩き、微妙に小高い山道を登る。

そして山を下ると再び田園風景が広がる道を歩く。

駅からの真っ直ぐな道は一つしかなく、間違っているということはないだろう。

ならば、間違っているのはお袋に違いない、ええ今そう決めましたとも。

「どうしよう……」

このまま地面に転がっていても、翌日の新聞に変死体として名前が載るだけだろう。

それは限りなくご勘弁願いたい事態だ。だがしかし、実際問題腹が減って動けない。

干乾びたらミイラかぁ……。

そんな嫌な想像が頭を掠めるが、現在進行形でミイラに近づいている気がする。

そんなことを考えていると、遠くから何かの音が聞こえてきた。何かが走る音……もちろん人なんかじゃない。

俺はその音を訝しく思いつつ、寝たままで辺りを見回す。

「んー……？」

僅かな砂煙を巻き上げながら、一台の車がこちらへと向かってくる。

黒塗りのソレは、やけに高価そうだ。お金持ちが持っているような車に似ている。

具体的に言えば、ロールスロイス……？

いやいや待とう自分。

こんな田舎の田舎を、何でそんな高級車が走っているというのだろうか。

何千万円とする車が、こんな田舎の泥道を走るなんてないだろう。

「ああ、幻覚か」

呟いて納得する。

そうか、俺はどうやら幻覚を見ているらしい。

だから、この聞こえてくる音は幻聴。

迫る黒い車体は、死の淵に瀕した人間が垣間見る幻……。

「って、んなわけあるかあっ!？」

叫んだ。

このまま寝転がっていても、トンを超える重量物に轢殺されるだけ。

俺は全力で逃げようとして、絶句する。

「いかん。逃げようにも逃げる場所が無い」

道は狭く、車一台通るのが精一杯。かくなる上は田んぼに飛び込むしかない。

この場合は転がりながら飛び込むことになるが。

そう覚悟したとき、黒塗りの車が減速する。

そして、俺の数メートル手前で停止した。

助かったと、俺は思う。地面に倒れ伏したままで。

俺がそうやって地面に転がっていると、運転席の扉が開いた。

それに次いで出てくる運転手。

黒のパリッとしたスーツに身を包んだ、やけにがっちりした体格のその運転手は、ゆっくりと俺に近づいてくる。

僅かに白髪が混じった髪に、柔和というか、落ち着いた雰囲気と
いうか。どこことなく人を安心させる雰囲気の人。

小さな子供がいれば、まさに好々爺とも言えるだろう。

「そこで何をしているのですかな？」

不思議そうに俺を見下ろしてくる。

まあ、確かにこんな場所で人が寝転がっていたら不思議だろう。

「……何をしているように見えます？」

「ふむ……五体投地ですか？」

「いえ、俺は仏教徒じゃないです」

ちなみに五体投地とは、仏教徒が行う最高の敬礼法だったはず。
だけど俺は無信教だ。

「そうですか。なら一体何を？」

覗きこむような視線を受けて、俺は白状することを覚悟した。
今この状況で、軽い冗談を飛ばす気力もない。

「すみません、行き倒れです」

白旗と言わんばかりに腕を振る。
ぐぐう……。

それに同調するように、俺の腹から情けない音が鳴った。

「それはそれは、大変ですな」

そんな俺の様子を見た運転手の人は、苦笑めいた笑みを浮かべる。
そして、俺に手を差し伸べてくる。

「これも何かの縁でしょう。私達の行く場所もこの先です。貴方さえ良ければ乗せていきますが？」

そう言って、黒い車を指差す。

……間違いない、ロールスロイスだ。

「是非乗せていつてほしいです、はい」

しかし今は高級車など関係ない。

関係あるのは、無事に婆ちゃんの家にとどり着くことなのだから。そうやって俺が返事をするのとはほぼ同時、車の後部座席の扉が開く音が聞こえた。

何だ？ と顔をそちらに向ける。

「どうしたの広田さん？ 人が倒れてるって……」

そんな声と共に、一人の女の子が車から降りてきた。

鈴のような声に絹のような黒の長髪。

腰まで届きそうな長い髪をなびかせた女の子は広田さんと呼んだ運転手へと顔を向け、次いで地面に倒れている俺に顔を向けて、

「ひ、ひき殺したんですか!？」

そんな、物騒なことを仰ってくれました。

第一話 夏の小道（後書き）

どうも初めまして、池崎数也と申します。このような拙作にお付き合いただいたき、真にありがとうございます。一応連載という形になるのですが、更新は不定期になると思います。こんな拙作ではありますが、今後ともお付き合いいただければ幸いです。

第二話 出会い

「ふう……生き返った」

俺はクーラーに当たりつつ、運転手……広田さんから受け取ったスポーツドリンクを飲み干してそう呟く。
別に死んでいたというわけではないが。

「しかし、何故このようなところを歩いていたのですかな？」

そんな俺に、広田さんが聞いてくる。

それと同時に車を発進させ、ちらりと視線を向けてきた。

「何故って言われても、俺自身さっぱりで。この紙に書いてある通りに歩いていたんですけどね」

ポケットから取り出す一枚の折りたたんだ紙。

お袋によって書かれたそれは、見事に俺を行き倒れさせてくれた代物だ。

広田さんが見たそうな視線を向けてくるので、開いて渡す。

「では失礼して」

紙を受け取り、片目で読んでいく。

ハンドルをきちんと操作している辺り、もう片方の目は前を向いているのかもしれない。

だとすれば凄い特技だと思う。俺はいらないけど。

「ふむ……」

読み終わったのか、広田さんは一度頷いて紙を手渡してくる。
俺はそれを受け取りつつ、口を開いた。

「えっと、何かわかりましたか？」

「はい。どうやら降りる駅を間違われたようですね」

「……………え？」

思わず固まる。

「紙に書いてある駅は、貴方が降りた駅の一つ先の駅の名前です」

「え、いや、ちゃんと駅名を確認しまし……………」

そこまで言っ言葉を止め、記憶を掘り起こしていく。

思い出すのは俺が降りたボロボロの駅。

そして、それに見合うくらい看板もボロボロだった。

木で作られたであろうその看板は、長年風雨にさらされていたのだろう。

頭文字辺りが読めなかった。

「……………もしかしたらっていう願いとか願望を込めて聞きます。この紙に書いてある駅名の頭文字に、何か一文字足した駅名がさっきの駅だったりしますか？」

そうやって尋ねると、広田さんは口元に苦笑を浮かべていた。

「願いと願望はあまり変わらぬ気もしますが、たしかに紙の駅名に西という字を加えればそうなりますな」

その言葉を聞いた瞬間、一瞬気が遠くなった。

「……というか、何であんなところに駅が……」

自分のポケっぷりに軽い絶望を味わいつつ、小声で尋ねる。

「駅を出て右の道を行けば町がありますからな。まあ、その町からしても外れの位置にあったわけですが……」

「さいですか……」

肩を落とす。

そしてふとミラーを見てみると、後部座席に座った少女と目が合った。

やけに楽しそうにしているのは、きっと俺の気のせいなのだと思います。

「くすくす……」

思いたかったが、それでも、後部座席の少女は笑っていた。

歳は俺と同じか少し下くらいだろう。

口元に手を当て、なにやらお上品に笑っている。

その様子はまさにお嬢様というに相応しい……って、あれ？

不意に行き倒れていたときのことを思い出す。

何故こんな田舎の中の田舎をこんな高級車が走っているのだろうか？

「どうかしましたかな？」

広田さんが声をかけてくれるので、俺は頷いて質問することにした。

「いや、さっき思ったことなんですけど……」

僅かの間、ミラー越しに少女へと目を向ける。

「何でこんなところを、こんな高級車が走っているのかと思いき
て」

「おかしいですか？」

「おかしいわけでは……いや、やっぱりおかしいということだ」

言いかけて言い直す。

すると、今度は後ろから声がかかった。

「ふふっ……正直なんですね」

僅かに楽しさを含んだ声に、俺は肩を竦めてみせる。

「実は狐に化かされていました、だと嫌だし」

「狐ですか？」

「狸でもOK」

そう言っただけは笑う。

流石に、この時代に狐や狸に化かされるなんてことはないと思う。
俺がそんなことを考えていると、広田さんが口を開いた。

「残念ですが、そういうものではありません。今日は町のほうに
用事がありまして、お嬢様をお送りしたまででございます」

「成程。何が残念なのかは触れないとして、その町に行った帰りの
途中で俺が行き倒れて……で、お嬢様？」

なにやら聞き逃せない単語に反応する俺に対し、広田さんは微笑

む。

「後ろに座っていらつしやるのがお嬢様でございます」

「はあ、お嬢様ですか……え、マジで!？」

肩越しに振り返ると、お嬢様と呼ばれた少女は照れ臭そうに笑う。
ただ、その笑顔に陰があるのは見間違いだろうか？

「牧原グループは御存知ですか？」

「え、ええ。まあ」

俺は驚きつつも頷く。

牧原グループとは、様々な商品を幅広く扱っている企業のことだ。
車や電化製品、果ては日用品などを取り扱っており、大企業と呼んでも差し支えないだろう。

「じゃあ、この子は……」

「牧原グループの社長である牧原幸之助様のご息女、牧原美雪様でございます」

広田さんの言葉を肯定するように、後部座席の少女が頭を下げる。

「初めまして、牧原美雪です」

「あ、うん。俺は藤倉鷹志。よろしく」

下げられた頭に戸惑いつつ挨拶を交わす。

いきなり俺を見て、『ひき殺したんですか!？』なんて言ってくれたけど、気にしないようにしよう。

「しかし、えーっと……何て呼んだら良いんだ？ 牧原？ あ、さ

んづけで牧原さんがいいか？」

「二択ですか？」

「二択ですか？ って聞かれてもな。流石に初対面の女の子を名前で呼ぶ度胸はないぞ。そんな恥ずかしい……もとい、馴れ馴れしいのは駄目だろ」

「うーん……お嬢様じゃないなら何でも良いですよ」

「そうか。もしお嬢様と呼べって言われたら困るところだったな。そもそも名前じゃないし。じゃあ、牧原って呼ばせてもらおうかな」

俺がそう言っていると、牧原は僅かに目を見開く。だが、すぐに表情を変えた。

「はい。だったら、わたしは藤倉さんって呼ばせてもらいますね」

そう言って、牧原が柔らかく微笑む。

今まで見たことある女の子の中にはなかった、安心できるような笑み。

俺はその柔らかい笑みに、思わず見入ってしまう。

「……どうかしましたか？」

そんな俺を訝しく思ったのか、牧原が首をかしげた。

俺は慌てて手と首を振る。

「いやいやいや。なんでもないですよ？」

「何で疑問系なんです？」

「そこはやんごとなき理由があるかもしれないだろう？ だから突っ込まないで」

俺は軽く混乱しつつそんなことを言った。

すると、そんな俺を見ていた牧原が口元を押さえて笑い出す。

「……ふふっ。おかしな人ですね」

「こ、好意的な意味だと捉えておくよ」

もし頭がおかしいと言われたら、流石に凹む。

俺はなんとか精神的ダメージから立ち直ると、今度はこちらの番と質問することにした。

「よし、それじゃあ今度はこっちから質問していいか？」

「はい。どうぞ」

「俺のお袋が女性に歳を尋ねて失礼なのは二十歳からと言っていたから尋ねるんだけど、君何歳？」

「わたしは十六歳ですけど……二十歳からだと言失礼になるんですか？」

「いや、そこは深く突っ込んじゃいけないところだとも言っていたな」

ちなみに、以前俺がお袋に歳を聞いたときは殴られた。しゃもじで。

「十六ってことは、高校一年？」

「いえ、二年生です」

「あれ？　ということは同じ年なのか」

同じ学年だが、通っている学校の場所が全く違うのだろう。

俺の通っている学校や、近隣の学校に牧原グループの娘さんが通っているなんて話も聞かないし。

「ということは、藤倉さんも二年生なんですか？」

「そういうこと。常盤台高校ってここに通ってるんだけど、牧原は？」

「わたしは私立香南学園に通っています」

そうか、と俺は頷く。

香南学園と言えば有名なお嬢様校だ。

イメージとしてもピッタリ……

「ってちよつと待った！ 香南学園ってここから行ける距離じゃないだろ！？」

納得しかけたのを慌てて翻す。

俺の記憶が正しければ、ここから県をいくつもまたがないと行けなかったはずだ。

むしろ、俺が住んでいる家のほうが十倍は近い。

慌てた俺に対して、牧原は至極落ち着いた表情で頷き返す。

「流石にこっちから通うことはできませんよ。夏休みの間だけ、こちらの別荘に住んでいるんです」

「なんだ、別荘か」

うんうんと頷いてみる。

別荘と言われても、生憎俺とは無縁すぎてピンとこなかった。

まあ、今乗っているこの車も無縁すぎるものだけでも。

「さて、見えてきましたぞ」

広田さんの声に、俺は前を向く。

牧原と話していたせいで気づかなかったが、ちらほらと民家が見えるようになってきた。

「うわ、田舎だ」

民家があると言っても、それより目に映るのは田んぼの海。その中に家がぼつんと浮いているようにも見える。俺の眩きを聞いた広田さんは、再度苦笑していた。

「よろしければ家までお送りしますが、いかがですか？」

「え？ いや、流石にそこまでしてもらうのは……」

「はっはっは。駅に行くよりも、そちらのほうが近いですよ。お嬢様、それでよろしいですか？」

「はい。藤倉さんの家の前まで送りましょう」

「……なら、お願いします」

頭を下げる。

今更ながら、地獄に仏ってこのことだよな、と内心で苦笑した。

ゆっくりと減速し、車が止まる。

俺が窓越しに辺りを見回すと、すぐ傍に一軒の家が見えた。

「ここか……」

いかにも田舎です、と言わんばかりの造りの一軒家。

俺は何とかたどり着けたことに安堵すると共に、広田さんと牧原に頭を下げた。

「ここまで乗せてきてもらって、どうもありがとうございました」
「いえ、困ったことはお互いさまですから」

そう言って微笑む牧原。

今度は見入らず、俺も笑い返した。

「それでも、だよ。本当に助かった。ありがとう」

そんな言葉に、牧原はくすぐったそうな表情を浮かべる。

「旅は道連れ世は情け、とも言いますしな。ところで、藤倉様はいつまでこちらに滞在するのですかな？」

「様は止めてくださいよ。背中がかゆくなっちゃいます。こっちには、一応二週間くらいいると思いますけど」

広田さんの問いにそう答えると、牧村が楽しそうに頷いた。

「そうなんですか。だったら、また会う機会もありますね」

「あるんだろうな。見たところ、この村もそんなに広くなさそうだし。あ、暇があったら遊ぶか？」

冗談混じりに、そんなことを尋ねてみる。

もちろん冗談の割合が大きい。九対一くらいの割合で冗談だ。

牧村グループのお嬢様が外で遊ぶ姿というのは想像できないし。

「え、いいんですか？」

しかし、その一の可能性に喰らいついてくるお嬢様がここにいた。

「え、本気!？」

思わず聞き返す俺。

「……何で言った本人が驚くんですか？」

「いや、そこはホラ、ねえ？」

何がねえなのかわからないが、俺は広田さんに救いを求めて目を向ける。

だが、広田さんは頷いていた。肯定の意味で。

「それもいいかもしれませんな」

思わず絶句。

まさか、肯定するとは微塵も思わなかった。

「ま、まあ、機会があったらってことで……」

なんとなく逃げられない気がしたので、そう言って俺は一步後ろに下がる。

「はい。その機会を待ってますね」

頷き、微笑む牧原。

その笑顔を見て、俺はふと思う。

少し面倒だけど、小遣い稼ぎになると思って来たこの村での生活は、思ったよりも、面白いものになるんじゃないか、って。

何の根拠も無い。

だけど、このときの俺は何故か自然にそう思えた。

牧原や広田さんと別れたあと、婆ちゃんの家に行って『遅すぎる』と叱られたのは余談である。

第三話 田舎暮らし

田舎の朝は早い。

それが、一日泊まった俺の感想。

「早く起きんね！」

そう言つて、“文字通り”叩き起こされ目をこする。
眠気が多分に残るのをこらえつつ、時計に目を向けた。

——午前五時。

「なんだ、夢か」

にこやかに、笑顔すら浮かべながら布団にダイブすると、すかさず婆ちゃんが手に持っていた丸めた新聞紙を振り下ろしてくる。

頭を叩かれて、俺は渋々目を覚ました。

「婆ちゃん、ぶつちやけ早すぎると思う」

いくら夏で日が昇るのが早いとはいえ、今まで健全な高校生活を送っていた俺としてはちと厳しい。

要約すると、すこぶる眠い。

「早めに水を撒かんと、暑くなつてからじゃいかんとよ」

「あー……了解」

そういえば、そんなことを聞いたことある気がする。

小学校の頃に、朝顔の水やり当番の説明でそんなことを担任の先生が言っていたと思う。

俺は寝間着から動きやすい服装に着替えると、洗面所で軽く顔を

洗って畑へと向かった。

「婆ちゃん、ぶつちゃけ広すぎると思う」

寝起きに言った言葉に似た台詞を吐きつつ、俺は目の前に広がる畑を見渡した。

目の前には青々と生える野菜の群れ。

大根、人参、トマト、トウモロコシ……他多数。

そして、驚くべきは畑の広さだろう。

「えっと、一辺が100メートルの正方形が1ヘクタールだったよな……」

目測で広さを測り、感嘆の息を漏らす。

「まあ、この歳になるとすることもないでな」

俺の様子を見た婆ちゃんは、どことなく嬉しそうにそう言った。

俺はそんな婆ちゃんに頷き返しつつ、手に持ったじょうろに目を落とす。

これで水を撒くのか……この広さを。

「大変だ、こりゃ」

婆ちゃんが応援を呼んだ気持ちが少しわかった気がする。

「鷹志はそっちの大根畑のほうから水を撒いておくれ。水の量はほ

どほどの」

「わかった」

婆ちゃんの指示に従い、大根畑のほうに足を向ける。

少しくらい水をやりすぎても、きつと蒸発してしまうだろう。

俺は畑の横を流れる溝からじょうろに水を汲み、端の列から水を撒いていく。

朝露に濡れた大根の葉が水を弾き、見ているだけで涼しく感じられた。

「うーん……たまにはこういうのもいいかもしれない」

まだ日が昇りきらない早朝。

僅かに明るいとはいえ、日が顔を見せるまであと幾ばくかの時間があるだろう。

昼間と違い、ひんやりとした朝の空気は清しい。

「こんな中を散歩するのもいいな」

浮かべたのは苦笑。

婆ちゃんの家にないで、自分の家でゴロゴロしていたらこんな気持ちになることもなかっただろうから。

バイト代のためもあるけど、そんなに卑下することもない。

都会には無い、穏やかな雰囲気はここにはあった。

少なくとも、朝の間は。

「暑い……」

朝の涼しげな気候はどこに行ったのか。

日が昇ってからの作業は地獄だった。

水やりを終え、朝食を食べてからの作業は草むしり。

始めはまだ涼しかったのだが、徐々に気温が上がって今ではまさに炎熱地獄。

滝のように流れる汗が、この上なく鬱陶しかった。

しかも、まだ午前中というから性質たちが悪い。

午後はまだ暑くなると婆ちゃんが言っていた。

遠くを見渡せば、同じように農作業をしている人たちがちらほら見える。

見えるのだが、それらが霞んで見えるのは俺の目の錯覚だろうか？

「おお、これが噂の屋気楼か」

激しく間違ったことを呟きながら、俺は足元の雑草を引き抜いて後ろへと投げる。

俺の後ろでは、引き抜かれた雑草が小山を形成していた。

「というか、雑草が多すぎる……お、またミミズだ。今度釣りにでも行こうかな……」

ここの土壌はきつと栄養満点なんだろう。

雑草を引き抜けば、ミミズとのエンカウントする可能性が非常に高い。

「ふう……この日差しさえなければ、まだマシなんだろうけどな」

きつと今夜は日焼けのせいで眠れないだろう。

そんなことを考えながら、俺は雑草を抜き続けた。

俺は疲れた肢体を投げ出し、ひんやりとする畳に寝転がる。

「……疲れた」

ぼつりと、天井に向かって呟く。

ついでに腕を上げて見てみれば、朝に比べて真っ赤になっている。窓の外を見てみれば、太陽もようやく西の空へと下りてきていた。

「いや、ありえないって……」

寝転がったままで愚痴る。

二週間で五万円貰えるんならいいかな、と思っていたけど、これは少々割が合わない気がした。

今日は量が多いだけで少ないときは昼ぐらいに終わると言われたけれど、それでも六時間以上は太陽に晒されながらの労働だ。

なにより、早起きが辛い。

そして、早起きも辛いのだが、それ以上に辛い問題がある。

「うーむ、することが無い」

暇を潰すものがまったくない。

ゲームは持ってきてないし、携帯は電波の状態がいまいち悪い。使えないことはないが、流石にずっと携帯にかじりつくのも馬鹿らしかった。

「婆ちゃん、この辺に何か店はないの？」

転がりながら婆ちゃんに聞いてみる。

太陽に焼かれた体には、ひんやりとした畳が実に心地良い。

「駅付近に何件かあるくらいじゃの」

「何件か、さすがにゲーセンはないだろうけど、少しは暇つぶしになるかな」

俺は畳から体を起こすと、とりあえず財布をポケットに入れた。

「じゃあちよつと行ってくるよ。一時間もすれば戻るから」

そう伝えると、俺は靴を履いて外に出る。

外はまだ暑かったけれど、昼間よりは少し涼しい感じがした。

「夕立は……降らないか」

俺は空を見上げてそう判断する。あと少ししたら太陽も山に隠れるだろう。

いくつか浮かぶ綿雲を数えつつ、のんびりと道を歩く。

遠くからは子供のはしゃぐ声や蝉時雨が耳に聞こえ、我知らず笑みを浮かべた。

「喧騒がないって、けっこういいもんだな」

車の音や雑踏の音。

そんな、俺が住む場所では当たり前前の音がここにはない。

そこまで都会ではないとはいえ、田舎と呼ぶには発展しすぎた俺の町では雑音が多すぎる。

きつと、だからだろう。

こんなにも心が落ち着くのは。

俺はそんな落ち着いた心のままで、周りを見回す。

「うん。なんだこの無駄に古ぼけた場所は」

十分もかからずたどり着いた駅で、俺はそう呟く。

店は確かに数件あった。

いかにも閑古鳥が鳴いていそうな喫茶店らしき建物。

八百屋なのか雑貨品屋なのかわからない建物。

タイムスリップしたかのような錯覚を受ける駄菓子屋。

置いてある本全ての製本日付が昭和になっていそうな古ぼけた本屋。

俺はいつの間にかタイムスリップしたんだろうか？

目の前の光景にそんなことを考えつつ、古ぼけた本屋に向かう。

この中では一番暇が潰せそうだという願いを胸に、自動ですらない扉を横へと引き開けた。

それと同時に漂う、古本特有の香り。

当たってほしくない予想が当たってしまったのか、漫画の類は置いてなさそうだ。

「おお、ジーザス」

呟きに意味はない。

暇を潰せそうにないと判断した俺は、回れ右をしようとして足を止める。

狭い店内の、さらに端。

白を基調とした服装に流れる黒髪が、目に映る。

手に持った本を真剣に読むその姿には見覚えがあった。

「よお、奇遇だな」

「……え？」

かけた声に反応して、その子は振り向いてくれる。

そこには、本を手にとってきょとんとした顔で俺を見る、牧原の姿があった。

第四話 茜色の帰り道

「えっと、藤倉さん？」

手に持った本を閉じつつ、牧原は首をかしげる。

俺の名前に確信を持ってない……ではなく、何故俺がここにいないのが不思議なのだろう。

もしも前者だった場合、かなり悲しいものがあるけれど。

「その不思議そうな顔は、俺の名前がわからなかったということだ
ファイナルアンサー？」

だからだろう、つい聞いてしまうのは。

「い、いえ。違います。なんで藤倉さんがここにいるのかなと思って……」

牧原は俺の質問に少し慌てながらそう答えると、手に持った本を本棚へと戻す。

俺はその様子を眺めた後、牧原の足元に置いてある袋に目を向けた。

紙袋に入ったそれは、この本屋で買ったものだろう。

袋一杯に詰められたせいか、口が閉じきっていなかった。

「一、二、三……七冊、か」

本の大きさからして、おそらく小説か。

よく見てみれば奥のほうに漫画が置いてあるみたいだけど、明らかに古そうな上、牧原が漫画を読むというイメージが湧かない。

牧原本人のことはまったく知らないから、実は漫画が大好き！
ということでもない限り、小説かその類の本だと思った。

「すげえな。それ全部小説？」

「あ、はい。司馬遼太郎っていう人の作品です」

「へえ、渋いの読むんだな」

「読んだことがあるんですか？」

「うんにゃ、まったく」

手を振って否定する。

自慢ではないが、俺は小説を読むより漫画を読むのが好きな人間だ。

だから、渋いとか言ったのはまったくの適当……というわけでもない。

「俺の友達が読んでいたことがあって、それを見た他の奴が渋いと言ってたんだ」

「そうなんですか。藤倉さんは読まないんですか？」

「俺？ 俺は小説より漫画のほうが好きだしな。小説を読まないわけじゃないけど、好んで読むってわけでもない。まあ、その話は横に置こう」

両手で物を横に置くジェスチャーをする。

「本を買いに来たっていうことは、本が好きなのか？」

「本が好き……というのもありますけど、屋敷に置いてある本を全部読んじやったんです。それで、新しい本を読みなくなっちゃいました」

広田さんのお勧めなんです、と言葉を繋げて、牧原は笑う。

それは、昨日も見た柔らかい笑み。

ただ、その笑みがどことなく紛い物染みて見えるのは、俺の気のせいだろうか。

昨日は空腹と疲れでそこまで気づかなかったが、牧原の笑みは、どこか空虚めいたものを秘めている。

「……どうかしましたか？」

俺がじつと見ていたせいだろう、牧原は少しの疑問を顔に浮かべた。

「……いや、なんでもない」

俺の勘違いかもしれない。

そう思うと、今の表情も自然なものに見えてくる。

「牧原はこれからどうするんだ？」

一度浮かべた疑問を打ち切り、とりあえずそう尋ねてみた。

牧原は足元の紙袋を手につくと、変わらないの笑みで頷く。

「屋敷に帰ろうと思います。あと少ししたら日も暮れますから」

そう言って、扉の向こうに目を向ける。

僅かに赤さを帯びだした日差しが見えて、俺はそっか、と声を返した。

「じゃあ、俺も帰るかな。思ったより何もなかったし」

店の奥にいる店主に聞こえないことを祈りつつ、扉に手をかける。

そして、ついでとばかりに振り返った。

「そうだな……一人で帰るのも暇だし、一緒に歩かないか？」

「——え？」

何を言われたのか、牧原は理解できなかったような目を向けてくる。

俺はそんな牧原に苦笑を浮かべると、僅かに軋む扉を引き開けた。熱されたアスファルトの匂いに、少しばかり眉を寄せる。

「冗談、ってわけでもない。暇なら話し相手になってほしいだけだよ」

本当にそれだけの話。

他意はなく、断られても問題はない。

そんな俺の様子を見て取ったのか、牧原は戸惑いながらも頷いてくれた。

「よし、じゃあ行こうぜ」

そう言って歩き出す。

後ろで牧原が扉を閉める音が、やけに、大きく響いた気がした。

「……………」

「……………」

無言で歩く。

一緒に歩こうと誘ったはいいが、いかんせん何を喋ればいいかわ

からなかった。

これがいつもクラスで喋っている奴らならいくらでも喋りようがあるが、昨日が初対面な上、どんな話題を振ればいいのか皆目見当がつかない。

だが、誘った以上は何かを喋らなければいけないだろう。

「なあ」

「あの」

見事に声が重なる。

そんな古典的な出来事に軽い頭痛を覚えつつ、俺はため息を吐いた。

「やっぱり……」

「ん？」

小さく呟かれた言葉に、俺は耳を傾ける。

「やっぱり、わたしとでは話しても面白くないですね」

……どうやら、さっきのため息を勘違いしてくれたらしい。しかも、思いつきり悪い方向に。

「いや、そういうことじゃない。ただ、何を話せばいいかわからないだけで、面白くないわけじゃない……」というか、お互い名前と通っている高校しか話してなかったな」

弁明しているうちに、根本的な問題に気づいてしまった。

「よし、では俺から自己紹介だ。名前は名乗ったから省略するぞ。

誕生日は9月29日のてんびん座。血液型はA。身長は176センチで、体重はこの間量ったとき63キロだった。好きな食べ物は多すぎて言い切れない。嫌いな食べ物は志乃……もとい、知り合いの作った料理もどき。あれは食材に対する冒涇だった。っと、そんなことは流すとして、次はそっちの番」

思わず知り合いの名前を出したのを流し、牧原にどうぞと言わんばかりに手を向ける。

牧原は戸惑ったような顔をするが、ゆっくりと口を開く。

「えっと、わたしも名前は省略しますね。誕生日は3月5日のうお座です。血液型はAです。身長は152センチで、体重は……って、言えませんか！」

「ちっ、流れに乗って言うかと思ったんだが……ナイスツツコミだ」
「昨日は二十歳以上の女性に年齢を聞くのは失礼って言っていたのに、体重は聞いて良いんですか？」

「ああ。体重が明らかに平均値を下回っていきそうな女性はOKだと親父が言っていた」

体重で怒る際に僅かに垣間見えた、“本当”の表情に俺は内心で笑う。

そして、さっきの疑問を確信へと変えた。

「まったくもう……女性に体重のことを聞いたらいけないんですからね？」

「いやいや、そこは俺から見たら体重がとても軽そうだという、遠回しな褒め言葉に喜んでくれ」

「何ですか、その素直には喜べない褒め言葉は」

「いや、もしかしたら俺が照れ屋ってことがあるかもしれないだろう？」

そう言って笑うと、牧原もつられたように笑う。

さっきのような作り物じゃない笑顔。

俺はその笑顔を見て頷いた。

「うん。牧原にはそっちの笑顔のほうが似合ってると思うぞ。何でそんなに作って笑うのか知らないけどな」

ごく自然に、そう告げる。

「え……？」

言われた牧原は、足を止めて俺を見た。

そんな牧原を、俺は笑って見返す。

「冗談だ。暇人の戯言と思って聞き流してくれ……っと、あれが別荘か？」

話はこれで終わりという意味を込めて話を逸らす。

ついでに視線も逸らして見てみれば、少し先に洋風な建物が見えた。

塀に囲まれたその家は、今まで見たことある住宅の中でも群を抜いて巨大だ。

「……はい、そうです」

牧原の声にはさっきまでの力がない。

「そっか。俺の婆ちゃんの家からけっこう近かったんだな」

ここなら歩いて五分もかからないだろう。
そんなことを考えつつ、俺は軽く右手を上げる。

「さて、それじゃあ俺も帰るわ。話し相手をしてくれてサンキュー
な」

「いえ……それでは」

小さく頭を下げる牧原に、俺は苦笑した。

「じゃあ、またな」

その言葉に返ってくる声はない。

俺はそのことに内心だけで再び苦笑を浮かべると、婆ちゃんの家
へと家路を辿った。

—— 美雪 S I D E ——

「じゃあ、またな」

そう言っつて背を向ける藤倉さんに、わたしは声をかけることがで
きない。

ただ、頭に残る一言。

『うん。牧原にはそっちの笑顔のほぅが似合ってると思うぞ。何で
そんなに作っつて笑うのか知らないけどな』

そんなことを言われたのは、初めてだった。

広田さんにも言われたことがない言葉に、わたしは戸惑っている。

「なん、で……」

あの人とは昨日まで初対面だったはず。

だというのに、あの藤倉さんはそう言っていた。

「……………」

すでに見えなくなった背中に、わたしは小さく微笑む。

「藤倉鷹志さん、ですか」

声に出して、うんと頷いた。

今まで話したことがある人とは違う。

わたしを“わたし”として見てくれる人。

わたしはくりと身を翻すと、屋敷に向かって歩き出す。

ただ、今浮かんでいる感情は、

「ふふっ……………」

久しく感じていなかった、“楽しい”というものだった。

第五話 田舎暮らし・その2

ゆっくりと目が覚める。

婆ちゃんによつて叩き起こされるわけでもなく、ごく自然な目覚め。

顔を傾けて窓の外を見れば、暗いながらも僅かに明るさを含んでいた。

時計に目を向けて確認すると、起きるには丁度良い時間を指している。

婆ちゃんの家に来て三日が経ったけれど、どうやら俺の体が適応してくれたらしい。

少し眠気が残った頭で、俺はそんなことを思う。

「さて、準備をしないと……」

田舎で農業も意外と良いかもしれない、なんてことを考えながら布団を畳もうとして、

——ガサガサッ。

不意に、そんな音が聞こえた。

「——」

息を止める。

音の発生源が一体何なのか、俺は周りを見回した。

窓側を見て、何もいない。

天井を見上げて、何もいない。

壁側を見て……ソレはいた。

壁に張り付いた、黒い物体。

凹凸などほとんどない壁に張り付く、やけに黒光りしているソレ。人類が誕生するより遙か太古より存在し、現代に至るまで存在し続ける生きた化石。

人間がソレを見て恐怖を感じるのは、きっと、そんな昔から生き続けたソレに対して畏怖を感じているからではないか。

昆虫綱網翅目。

黒い悪魔とすら呼ばれる、人類に対する侵略者^{インベーダー}。

「で……」

人はソレを、ゴキブリと呼ぶ。

「ででで出た——！！」

叫んだ。

近所迷惑なんのその。

そもそも近所に家がないから無問題。

問題があるとすれば、そのゴキブリがやけに巨大だということだろっ。

「でかつ！ いやいや、でかすぎだテメエ！ 調子に乗るなよ！」

そんな俺の声に苛立ったのか、体長5センチを軽く超えたゴキブリが、大きく羽を広げた。

ブーン……。

嫌な羽音を響かせながら、飛翔する巨大ゴキブリ。

「うおおー！ こっちに来るんじゃないやねえ——！」

残っていた眠気なんて木っ端微塵にどこかへ消えた。
今あるのは、ただ純粹な恐怖だけ。

羽を広げ、全長が10センチほどに錯覚できるゴキブリが眼前へと迫る。

「とうっ！」

俺は生存本能の促すままに、体ごと真横へと飛ぶ。

ヘッドスライディングでもするかのように頭から突っ込み、前転をして両腕を構える。

「く、来るならこい！ いや、でもできれば来ないで！」

俺が避けたことにより、再度壁に張り付いたゴキブリにそう叫ぶ。周りを見回すが、殺虫スプレーはおろかハエ叩きすらない。

「くそ！ まさか素手で倒せと！？」

難しくはない。

ただ、素手で殺すとなると、今まで生きてきた中でトップ3に入る精神的ダメージを負ってしまいそうだ。

その光景を、潰す感触と共にリアルに想像できてしまった。

「い、嫌すぎる……」

ぞっとする。

こんな恐怖を感じたのは、俺の幼馴染みが料理を作ったとき以来だ。

だが、そんな俺にお構いなしでゴキブリは羽ばたく。

再び俺に向かって特攻してくるソイツを前に、俺は硬直するしか

できない。

「うわああー!!」

「うるさか!!」

横合いからの声にそちらを向くと、そこには襖を開けた婆ちゃんが立っていた。

俺に向かって飛んでくるゴキブリを一瞥すると、腕を振り下ろす。まさかと思った瞬間、婆ちゃんの右手は、ゴキブリを叩き落としていた。

突然の攻撃に、ゴキブリは地面に落ちて動かなくなる。

婆ちゃんはそのまま右手でゴキブリをつかむと、窓を開けて外へと放り投げた。

「ほら、畑に行くばい」

何事もなかったかのように、婆ちゃんは歩き出す。そんな婆ちゃんを見て、俺は思わず呟く。

「すげえ……」

つい、尊敬の眼差しで見ってしまうのは仕方ないだろう。そして、前言を撤回する。

「……田舎って怖い」

ゴキブリを見たことがないわけではない。

ただ、あんなに巨大なゴキブリがいるというのが嫌過ぎる。

俺は頭を振って気を入れなおすと、先に歩く婆ちゃんを追うことにした。

「ああ……疲れた」

水やりに雑草抜き、そして今日は大根の収穫をした。

頭上を見上げれば、太陽はまだ中天を僅かに超えた程度。

今までの中で、一番早く片付いた。

グラスに入った麦茶を飲みながら、ほっと息を吐く。

早く終わったから良い……とは一概に言えない。

時間が余れば、その分はすることがなくて暇になるという嫌な現実があるからだ。

「店もほとんどないしな……」

することがないから昼寝でもしようかと思っただけ、今寝たら夜眠れなくなる。

ただでさえ九時過ぎに寝て五時に起きるという早寝早起きをしているのだから。

「何かないかな」

暇潰し代わりに物置を漁る。

朝のゴキブリが出ませんように、と祈りながら、邪魔なものをどかしていく。

明らかに昔の物ばかりが出てくるだけで、特に面白そうなものはない。

「なんだ、何もないのか……っと、何だこれ？」

ふと目に留まった細長い物を二本引っこ抜き、触って確かめる。

「……釣竿か」

繫げてみれば、一本釣り用の釣竿だった。

さらに漁ってみると、糸と釣り針、それと錘とウキが出てくる。これだけ揃っていれば、十分釣りに使えるだろう。

「よし。暇潰しの道具を見つけた」

軽くガッツポーズを取りながら、物置の扉を閉める。

ついでにぶら下げてあるバケツと小さな入れ物を手に持ち、婆ちゃんに声をかけた。

「婆ちゃん、ちょっと釣りに行ってくるよ」

しかし、昼寝をしているのか返事はない。

俺はまあ大丈夫か、と呟いて、歩き出した。

畑の横にある溝に沿って歩いていく。

ついでに畑を掘り返してミミズを捕まえると、入れ物に入れておいた。

そうしてしばらく歩くと、岩場に下りることができる小川へとたどり着く。

「おお……綺麗な川だな」

流れる水に感嘆の声を漏らす。

俺が住んでいる場所にある川と比べると、まさに泥水と清水の違いがある。

そのまま飲んでもまったく大丈夫そうだ。

魚も気持ち良さそうに泳いでいる。

バケツに水を汲むと、自分の右横に置いて腰を下ろした。

釣竿を繋ぎ、仕掛けを作る。

糸に釣り針と錘、それとウキをつけると、針にミミズを刺してつけた。

「よし、準備完了と。そりゃ」

軽く、振り子のように糸を放る。

小さな水音を立てて、ミミズが水中に沈んでいくのを眺めながら欠伸を一つ。

清流の音に耳を傾けながら、空を見上げた。

「良い天気だ」

雲一つない空に、眩いた言葉が吸い込まれていく。

俺が視線を水面へと戻すと、ウキが少し揺れた。

軽く上下に動き、一気に水中へと沈む。

「つと、きたな！」

それに合わせて竿を引くと、ぐんと先端が引っ張られた。

俺はその力強さを楽しみながら竿を引いていく。

魚を疲れさせるように、魚が泳ぐ方向とは正反対に引く。

そうして数十秒もすると、魚をすぐ近くまで引き寄せることができた。

「よっし、一匹目！」

糸を手繰り寄せて魚を引き上げる。

すると、体長15センチ程のフナが釣り針にかかっていた。

手早く針を外すと、バケツに入れる。

そしてミミズをつけて、再び川へと放った。

見た感じ、この川の魚は警戒心が薄い。

こうやって釣りをする人があまりいないのだろうか？

そんなことを考えながらウキを見ると、それを肯定するかのよう
に上下に揺れた。

一気に沈むのと同時に竿を引き、釣り針をがちり刺さらせる。

「よっしやきた！」

竿を引く力に対抗しながら、俺は笑う。

釣りはそこまでするわけではないが、やはり釣れると楽しい。

右に左に竿を片手で動かしていると、不意に影が差した。

「釣れますか？」

かけられた声に、俺は左手を振る。

「まあ、ぼちぼちな」

「そうですか」

影が揺れる。

風に吹かれたのか、長い髪の影響が軽くなびいた。

「隣に座っても、いいですか？」

「ああ。別に俺の土地ってわけでもないし、かまわないぞ」

そう答えると、バケツと反対側……俺の左側に腰を下ろしてくる。俺が少し目を向けると、麦わら帽子をかぶった牧原と目が合う。

「こんにちは、藤倉さん」

「よっ、二日ぶりだな牧原」

喋りながら竿を引く。

「ぱしゃん、と水音を立てて、さっきのよりも少し大きいフナが姿を見せた。」

「釣り、好きなんですか？」

「んー……好きってほどでもないんだけど、することがなくてな」

釣り上げたフナから針を外し、バケツへと入れる。

「お手伝いのほうはどうしたんです？」

「それはもう終わった。今日は割と早く片付いたんだ」

ミミズを取り、釣り針へと刺す。

「牧原は何してたんだ？　というか、よく俺がここにいるってわかったな」

「偶然こっちに歩いていったのを見たので、来てみました」

三度目、ミミズを水中へと沈めた。

「へー。もしかして、牧原も暇な人？」

「そうですね。一昨日買った小説も、全部読んじやいましたから」

今度は魚も警戒しているのか、ウキは動かない。

「すごいな。もう七冊読んだのか」

「すごくはないですよ。他に、することもなかったですから」

川のゆっくりした流れに押され、ウキがゆっくり動いていく。

「成程。そこで俺が歩くのを見つけた、と」

「そういうことです」

流れたウキが、不意に動きを止める。

「お暇でしたら、少し話しませんか？」

「暇も何も、今は釣りをしている。けどまあ、話すのは賛成だ」

俺は試しに、竿を軽く引く。

すると、魚がかかった感触が伝わってきた。

「ビンゴだ」

「え？」

きょとんとした牧原。

俺はそんな牧原を見て、笑う。

「よし、パス！」

「え……わっ!？」

竿を手渡すと、牧原は驚いたように俺を見る。

「ほらほら、引かないと魚が逃げるぞ」

「えっと。こ、こうですか？」

牧原は言われたままに竿を引く。
だが、釣りをしたことがないらしく、ただ真っ直ぐに竿を引いた。
そのせいか、今までしなっていた釣竿が不意に緩む。

「あゝあ……バレたな」

「バレた、ですか？」

いまいち状況をつかめていないのだろう、牧原から竿を受け取って針を見てみると、ミミズだけなくなっていた。

「ああいう場合は、魚が泳ぐ方向と反対に竿を引くんだ。そうすれば針が外れることもない。というわけで、もう一回だ」

ミミズをつけ、川に投げてから竿を渡す。

牧原はそのまま竿を受け取ろうとして、顔を上げた。

「……なんでわたしが釣りをすることになっているんですか？」
「今気づいたのか。そうだな、強いて言えば運命だ」

強引に釣竿を渡して水面に目を向け、ウキを指差す。

「いいか。あれがウキって言って、魚が餌を食べているのを表す道具だ。餌を突っついてくるくらいなら軽くウキが沈んで、食いついたら一気に沈む」

「そうなんですか……いえ、だからなんでわたしが」

「ここで注意する点はだな、食いついてもウキが沈まないときだ。ウキが倒れた場合、もしくはウキが不自然に横に動いた場合も魚がかかっている可能性が高いぞ」

抗議の視線を無視して説明を続ける。

「ほら、ウキを見ておかないと餌を持っていられるぞ」

最後にそう締めくくると、牧原は首をかしげながら水面に目を向けた。

だが、時折物言いたげな視線を向けてくる。

「俺ばかり釣るのもなんだしな……というわけでも、牧原にもさせてみようかと」

「いえ、いいですよ。藤倉さんが釣ってください」

「無理。急に発生した原因不明の腕の痺れで竿を持てない」

勿論嘘だが。

「もう……嘘ですよ、それ」

それをわかっているんだろう。

牧原は小さく呟きながらも、その表情はどこか柔らかい。

「いやいや。後天性腕痺れ病という、我が家に伝わる奇病なんだ」

「家に伝わるのに、先天性じゃなくて後天性なんですか？」

「おお、良い着眼点だ。花丸をあげよう」

軽い、会話のキャッチボール。

それを楽しみながら、俺は欠伸をする。

軽く目をこすり、眠気覚ましに空を見上げた。

目の端に映った竿の先端が、軽く揺れる。

「あっ！」

それと同時に聞こえる声。

「なんだ、魚がかかったか？」

笑いつつ視線を戻して、絶句した。

「ふ、藤倉さんっ！」

視線の先、魚がかかったかと見てみれば、やけに細長い生き物が食らいついていた。

しかもウキに。

「おい、蛇なんか釣ってどうするつもりだ？ 実はウナギです、とかいうオチがあるなら笑ってやるけど」

とりあえず素で尋ねてみる。

魚の代わりに蛇を釣るとは、ある意味すごい才能だ。

まあ、水面に浮いているウキに蛇が噛みついたただけだろうけど。

「どうすればいいんですか！？」

牧原は軽くパニックに陥っている。

その様子に笑いたくなっただけけど、とりあえず石を投げて蛇を追い払うことにした。

近くに石を投げられたせいか、蛇は慌てて逃げていく。

逃げる蛇を見ながら、牧原は大きく息を吐いた。

「へ、蛇って泳げたんですね」

心底驚いた様子に、俺は今度こそ笑ってしまう。

「あ、笑わなくてもいいじゃないですか!？」

笑った俺に対し、牧原は頬を膨らませる。

そして、そんな自然の反応に、再び笑ってしまった。

第五話 田舎暮らし・その2（後書き）

補足というほどではないですが、文中にありました、蛇がウキに噛み付くというのは作者自身が体験した実話です。正直ビビりました。ちなみに、蛇は本当に水面を泳ぎます。作者が川で泳いでいたら、実際に遭遇したことがあります。怖いです、ええ。皆様も、川で泳ぐときなどはご注意を。

第六話 ラムネとお嬢様

石を投げ込んだせいか、今まで見えていた魚がいなくなってしまった。

俺は、隣でまだふくれっ面をしている牧原に話しかける。

「今の騒ぎで魚がいなくなっただけだ」

「……石を投げたのは藤倉さんです」

「蛇を釣ったのは牧原だな」

拗ねたように聞こえる声を一刀両断し、俺は釣り竿を受け取った。

仕掛けを外し、竿を真ん中から取り外す。

ついでにバケツに入っていた魚を川へと逃がした。

「逃がすんですか？」

「ああ。別に食べるってわけじゃないし、キャッチアンドリリースだ。あ、もしかして食べたかったのか？ 生で」

「……生で食べても大丈夫なんですか？」

「いや、無理。マグロとかならともかく、フナを生で食うのはよっぽどの挑戦者だな。熊なら大丈夫かもしれないけど」

外した仕掛けはまた今度使えそうなので、入れ物に入れておくことにする。

「さて、この川狭いから石投げをするわけにもいかないし」

そう言って、俺は立ち上がった。

隣では、牧原が何事かと目を向けてくる。

「暇なら散歩しようぜ。このままここにいたら、日射病になっちゃう」

俺は帽子がないしな。

そう言葉を繋げて、牧原の麦わら帽子を指先で弾く。

「次からは、帽子を被っておいたほうが良いですよ？」

そんな俺に牧原はそう告げて、ゆっくりと立ち上がった。

とめどない会話をかわしながら、俺達は婆ちゃんの家までやってくる。

「ちょっと待っててくれ。釣り竿置いてくる」

牧原が頷くのを確認すると、俺は小走りに釣り竿とバケツを置きに行く。

婆ちゃんはまだ昼寝の最中らしく、玄関の扉を開けてもまったく気づかなかった。

「お待たせ」

正味二分程度で牧原の元へと戻ると、牧原は道端の向日葵を眺めている。

憎々しげ、とまではいかないが、険を帯びた目。

俺が牧原にもう一步近づくと、牧原は向日葵から視線を外して俺へと目を向けた。

「あれ、早かったですね」

そこに先程までの目つきはない。
常の如く浮かべた、柔和な表情。

「ただ荷物を置くだけだからな。さて、それじゃあ行こう」

特に触れず、俺は歩き出す。

そんな俺の隣に、牧原が並んだ。

「行くつて、どこにですか？」

「駅前。んでもって駄菓子屋だな」

「駄菓子屋……ですか？」

「あれ？ 駄菓子屋って知らないのか？ 簡単に言えば、昔のお菓子が売ってあるところだよ」

説明しながら、道路に転がる小石を軽く蹴り飛ばす。

小石は勢い良く転がり、道端の溝へと飛び込んだ。

「お菓子を買いたいんですか？」

「お菓子よりも炭酸が欲しい。こっちに来て飲んでないしな。駄菓子屋ならありそうだ。あと、お菓子って言っても牧原が想像しているようなやつはないと思うぞ」

牧原はそうですか、と頷く。

きつと、頭に浮かんだお菓子はクッキーなどではなからうか。

駄菓子屋に置いてないとは言わないが、牧原が食べたことのあるクッキーとは天と地ほど差がありそうだ。

「何か炭酸があればいいんだけどな」

やはり夏と言えば炭酸飲料を飲みたい。

しかし、婆ちゃんの家には当然ないし、自動販売機すらも見当たらなかった。

これで駄菓子屋に売ってなければ、当面は麦茶での生活になる。

俺は、そんなことにならないように、ともう一度小石を蹴り飛ばした。

「……あつた」

駄菓子屋に入っすぐ、俺は冷却用のケースに入ったラムネを見つけてガッツポーズを取る。

そんな俺を、牧原が珍しそうに見ていた。

「それが炭酸ですか？」

「炭酸じゃなくて炭酸飲料。それで、これはラムネっていうんだけど、まあいいか。牧原は飲んだことないの？」

ビンのラムネを一本取り出し、ケースを閉める。

「はい。そもそも、初めて見ました」

「初めてって……それもある意味すごいな」

苦笑しながら、俺は閉めたケースを再び開けてもう一本ラムネを取り出す。

ついでに適当にお菓子を見繕い、店の奥に座っているお婆さんへと近寄ってお金を払った。

「よし、外で飲もうか」

「あ、はい」

牧原を連れて、すぐ傍のベンチに座る。

駄菓子屋のすぐ傍にあることから、きつとここで食べる子供が多いんだろう、ダンボールのゴミ箱も置いてあった。

俺は二本のラムネを取り出すと、一本を牧原に向ける。

「ほい」

「はい？」

向けられた牧原は、訝しげに俺とラムネを交互に見返した。

「飲んでみ。美味しいから」

「え、でもそれは藤倉さんが買った物ですよ？」

「いいからいいから。というか、一本は牧原用に買ったんだし」

渋る牧原を無視して、ラムネを手渡す。

ラムネを両手で受け取った牧原は、困惑を貼り付けた顔と訝しげな視線で俺を見てくる。

「はいまずはキャップを外してー」

その視線をも無視しながら、俺は自分のラムネのキャップを外した。

「次の中からこの小さい部品を取り出す」

次いで、中から出てくる小さな部品を取り出す。

ビンの口より一回り小さいソレは、栓をしているビー玉を外すた

めに必要な物だ。

「そしてこの小さいのを置いてー」

ビンの口に置いて、俺は右手をその上に添える。

「ポンと押し込む！」

勢いをつけて押し込み、ビー玉を外す。
それを見た牧原は目を丸くしていた。

「い、意外と理に適った作りですね」

「まあな。ほら、やってみ」

俺が促すと、牧原はキャップを外す。

そしてオドオドとした手つきで小さな部品を取り出そうとして、

「出てきません……こうかな？」

ラムネをひっくり返し、振ることによって取り出した。

「……………」

思わずそれを凝視する俺。

部品が出てきたことに満足するかのように、牧原はビンの口に添える。

あとは勢い良く押せばビー玉が外れるのだが、力加減がわからないのだろう。

牧原は小さく、えい、とか呟きながらビー玉を押すことに躍起になっている。

その間にも、ラムネのビンは上下に揺れていた。

「あー……」

俺は澄み切った夏空を見上げる。

手に持ったラムネを傾けて飲んで見れば、中のビー玉がカランと澄んだ音色を響かせた。

そんな俺の横で、牧原はビー玉相手に奮闘している。

今までの力では開かないことを悟ったのか、少し腕を振り上げた。それに合わせて、俺は横に移動する。

「えい！」

勢い良く振り下ろした腕。

ええ、そこまでは良かったですとも。

俺は心中でそう呟いて、一つ言い忘れたことを付け加える。

「炭酸飲料って、開ける前に振ると吹き出るんだぞ？」

言ったが既に時遅し。

散々振られたラムネは、そのお返しと言わんばかりにビンの口から中身を吹き出した。

「わぷっ！？」

それをモロに顔面で受け止める牧原。

遠くを歩いていた小学生らしき男の子が、『わー、あの姉ちゃん馬鹿でー』なんて言っていたが、きつと聞こえていないだろう。

「ふ、藤倉さん！　そういうことは開ける前に言うてください！」

「いやスマン。降って湧いた悪戯心に勝てなかったんだ」
「もう！　そういうときは勝ってください！」

そう言いながら、牧原はポケットから白いハンカチと取り出して顔を拭く。

「でも……」

拭きながら呟かれる言葉。

「甘くて、美味しかったです」

照れたように、それでいて楽しそうな声。
そんな牧原の表情は、今たしかに“笑って”いた。

「だろ？」

俺もそれに笑い返し、ビンを傾けて中身を飲む。
それに倣うように、牧原もビンを傾けた。

「……飲めません」

「そこでお約束をかますかね君は。ビー玉をその凸凹に引っかかるようにすれば飲めるんだ」

「あ、なるほど」

一つ頷いて牧原がラムネを飲む。

「どうだ、初めて飲んだ炭酸の味は？」

「……喉がピリピリします」

「わかった。それが初めて炭酸飲料を飲んだときの人間の感想だと、

自由研究で発表してやる」

「そんな自由研究は嫌ですよ」

俺の言葉に笑う。

それに合わせて、俺も笑っておく。

二人分の笑い声が、夏空に混じり合って消えた。

「四時ちよつと、か」

ポケットから携帯電話を取り出すと、時間を確認して一つ息を吐いた。

まだまだ、日が暮れるには時間が余っている。

俺がまだ少し中身の残っているラムネを横に置くと、牧原が口を開く。

「それ、携帯電話ですよね？」

隣に座った牧原が、覗き込むようにして聞いてきた。

俺は携帯を片手で弄びつつ、肯定の意味で頷く。

「こんな形の食べ物があったら、中々斬新な発想だよな。そういう牧原は持っていないのか？」

「一応持っていますよ」

「一応、か。まあいいや、せっかくだからメールアドレス教えてくれない？」

一応という言葉に引っかかりを覚えたけれど、深くは追求しない。

「……別に良いですけど、使い方をよく知らないなので藤倉さんのほうで入れてもらえますか？」

そう言っ、牧原はポケットから白い携帯を取り出す。
サンキュ、と呟きつつ受け取って、折り畳み式の携帯を開いた。
ボタンを押して操作し、俺のメールアドレスを登録して指を止める。

牧原の携帯に登録してある人数は、今登録した俺を入れて、丁度片手の指の数しかなかった。

つまりは五人分。俺を除けば四人分しか登録されていなかったことになる。

「どうかしましたか？」

不思議そうな顔。

その、さっきまでの表情とは違う、“作られた”表情を見て思う。
ああ、この女の子はそういった人間なんだな、と。

「いや、別になんでもない。あとはこの携帯から俺のほうにメールを送って、と」

誤魔化すように携帯を操作し、俺の携帯にメールを送る。

僅かな間を置いて届いたメールのアドレスを『友達』の欄に登録すると、七十四件目だと表示された。

「これでよし、と。友達のところに登録しといたから」

何気なく、そう告げる。

「——え？」

そんな言葉に、牧原は、ひどく驚いたようで、

「とも……だち……？」

まるで異国の言葉を聞くように、繰り返す。

「一緒に釣りして、一緒にラムネ飲んで。これなら、友達って言うても良いと俺は思っただけど。どうかな？」

真っ直ぐに見返す。

冗談やおふざけではない、真剣な目で。

「……っ！」

そんな俺から、牧原は視線を外して俯く。

俯いたせいで表情は見えないが、僅かに、下唇を噛み締めているのだけは理解できた。

俺が口を開こうとした瞬間、牧原が立ち上がる。

「……帰ります」

声に込められたのは拒絶の意味か、はたまた極まった困惑か。俺はそれを止めることなく、

「ああ。じゃあ、またな。今度は二人分の釣り竿を用意しとく」

軽く笑って、そう言った。

牧原はそれに答えることなく歩き出す。

早足に、一刻もこの場にいたくないとでも言つかのように。
そんな牧原を見送りながら、すぐ横に置いたラムネのビンをつかむ。

傾けて飲んでみれば、暑さのせいかわんわんしている。

「……ちよつと早すぎた、かな」

抜けていなかった炭酸が、僅かに喉にしみた。

第七話 対話

人間、慣れる生き物だということがよくわかった。

俺は水が溢れんばかりのジョウロで水を撒きながら、そんなことを思う。

「こんなもんか……」

適度に水を撒き、額に浮いた汗を拭った。 婆ちゃんの家に来て

早一週間。

すでに九時過ぎに寝て五時頃起きるという習慣が身に着ついてしまった。

高校生の生活ではないと嘆くべきか、健康的な生活を送れることに感謝すべきか、甚だ迷うところだが。

「雑草は抜いたし、次はトマトの収穫でもするか」

綺麗な赤みを帯びたトマトを見ながら、そんなことを呟く。

どれなら収穫できるか、それも既に覚えた。

「婆ちゃん、次は何すればいいんだ？」

一応、勝手に収穫するわけにもいかないので、婆ちゃんに尋ねてみる。

「今日はもうすることがなかよ。トマトは明日取るけん。あとはゆつくりしてよかよ」

「了解。じゃあ、ちょっと休憩して釣りにでも行ってくるよ」

俺は使った道具をまとめると、婆ちゃんの家へと向かう。
慣れたおかげで早く終われるようになったせいか、時間はまだまだ余っている。

そのことに軽く笑いながら、俺は釣り竿を取りに行った。

「さてさて、今日は何が釣れるかな、と」

釣り糸を垂らしながら、そんなことを呟いてみる。
そんな俺の脇にはもう一本の釣り竿。

あのとき約束した……まあ、一方的なものだが。

「つたく、せつかく作ったのに……」

竹で作られたその竿は、俺が作ったものだ。

物置を漁ったけれど釣り竿は一本しかなく、婆ちゃんの家の中に置いてあった枯れた竹を使って作ったもの。

大物がかかれば一発でご臨終しそうだが、二、三十センチぐらいの魚ならなんとか大丈夫だろう、多分。

「一応試してみるか」

今まで使っていた釣り竿を置き、竹の竿を持ってみる。

仕掛けはつけていたので、ミミズだけつけて水面に放った。
ぼちゃん、という小さな音と共に波紋が広がる。

俺はそれをぼんやりと見ながら、一つ欠伸をした。

欠伸で涙が滲み、霞んだ視界をこすって直す。

そんな俺の隙を突くかのように、ウキが一度揺れる。

「おつ、きたか？」

軽く気合いを入れ、ウキの動きを注視。

上下に微かに動き、一拍の間を置いて大きく水中へと沈み込む。それと同時に、竿を引いた。

糸が張り、竿の先端が一気に引き込まれる。

「こんなに引つ張られても折れません。ミシミシ言ってますけど、竿はしなるだけです」

なんとなく説明口調で喋りつつ、竿を引いた。

言葉の通り竿がミシミシといつているが、そこまで危ないわけじゃない。

それ以上に竿がしなり、役目を全うしてくれる。

そのことに満足しながら竿を引き、ふと、影が差していることに気づいた。

俺はやつと来たか、と振り向こうとして止まる。

地面に見えた影はやけに肩幅の広い、がっしりとした体格に見えた。

「釣れますかな？」

耳に聞こえたその声に、俺は内心で驚く。

……成程、たしかにこっちがくる可能性もあったか。

「まあ、ぼちぼちですね」

以前牧原に返した言葉と同じものを返しながら、俺は振り向いた。針にかかった魚が、水面を跳ねる音が響く。

振り向いた先には、行き倒れた俺を拾ってくれた運転手、広田さ

んが立っていた。

「隣に座ってもよろしいですか？」

「ええ。全然構いませんよ。あ、良ければどうです？ 釣り、しますか？」

俺はもう片方の竿を軽く見て尋ねる。

「それも良いですな。では、お借りしましょう」

広田さんは差し出した釣り竿を受け取ると、手早くミミズをつけて放り込む。

その手際を見た俺は、感心して頷いた。

「手馴れてますね。よく釣りをするんですか？」

「いえ。昔取った杵柄と申しますか、私も幼少の頃はよく釣りをしていたもので」

そう言って広田さんは笑う。

俺はそうですか、と相槌を打ちながら、先程かかっていた魚を釣り上げた。

「フナか」

「フナですな」

体長二十センチほどのフナを釣り上げ、バケツに入れる。

俺のそんな動きを見ながら、広田さんが口を開いた。

「よくここで釣りをなさるのですか？」

「まあ、そうですね。他にすることもないですし」

ミミズを取り、針に刺す。

「農業の手伝いと言っておりましたが、そちらは？」

「最近慣れてきたんで、早く終わるんですよ。そのおかげで、余った時間はこうして釣りができます」

軽く、振り子状にミミズを放って川の中へと投じる。

「広田さんは良いんですか？」

「何がですか？」

「仕事とか、他にすることですよ」

「ふむ……まあ、これも仕事の一環と言ったところですからな」
「釣りが、ですか？」

俺がそう尋ねると、広田さんの表情が僅かに変わる。
柔和な表情はそのままに、目だけが僅かに細まった。

「藤倉様と話すが、です」

その視線を受けて、俺は笑う。

「様は止めてくださいよ。背中がかゆくなります……それで、牧原のことですか？」

「はい。その通りでございます」

広田さんはゆっくりと頷く。

俺はそんな様子に、肩を竦めてみた。

「……もしかして、牧原の機嫌を損ねたから俺を殺しに来たとか？」

「どこの世界の話ですか、それは？」

「スンマセン、冗談です」

そう言っただけだと、広田さんは相手を崩す。
何が楽しいのか、口元を押さえて笑っていた。

「成程、貴方様は今までお嬢様の近くにはいなかった性格の方ですな」

「へえ、いなかったんですか？」

「ええ。いえ、そもそも……」

広田さんは一度言葉を区切る。

視線を俺から外すと、水面のウキへと向けた。

「“普通”と呼べる方がいなかった、と言ったほうが正確ですな」

何かを堪えるように、広田さんがそう呟く。

「普通、ですか」

「はい」

「それはどういう意味で？」

俺がそう尋ねると、広田さんは苦笑を浮かべる。

「そのままの意味でございます」

「なら、俺は普通ってことですか？」

俺も広田さんに倣うように、視線を外してウキへと移す。

「普通でしたな。一緒に釣りをして、一緒にラムネを飲む。それで

相手を友達と思うことができるほど、普通の方でした」

「……やけに詳しいっすね。もしかして、どこかで見ていたとか？」

もしくは牧原が話したか。

そう考えて広田さんを見てみれば、広田さんは薄く笑っていた。

「申し訳ありませんが、見ておりました。この土地が田舎とはいえ、用心するに越したことはないですからな。失礼ながら、気づかれないうよう隠れておりました」

「すげ……気づきませんでしたよ」

広田さんの発言に、驚嘆の息を漏らす。
いや、正直気づかなかった。

「失礼ついでに……」

そんな俺の驚きを他所に、広田さんは言葉を続ける。

「貴方様の素性も調べさせていただきました」

「素性？」

「ええ。行き倒れと言っていました、もしかや嘘やもしれぬと思いましてな」

「……なんでそんなことを？」

驚きを込めて尋ねると、広田さんは申し訳なさそうな顔をする。

「牧原という名は大きなものでございます。それ故に、利用しようとする者、排斥しようとする者、様々です」

そこまで言われると、俺でも理解できた。

つまり、俺が牧原を利用する目的であそこにいたと思われたということ。

「いやいや、恥ずかしい話ですけど、俺が倒れてたのは偶然ですよ。駅名を間違えて……改めて言うとなんかに恥ずかしいですね。とにかく、そんな大それたことをする気はないですって」

手を振って否定する。

「でしような。そのようなことをする目的もなければ、理由もない。まったくの偶然であの場に行き倒れていらした」

「うわ、そう真面目に行き倒れたと言われると、無性に恥ずかしいのは何故？　つと、まあそれは置いといてください」

いい加減、何度も行き倒れたと連呼されても困る。

俺はこれから話を変えるべく、本題に移ることにした。

「それで、本当のところは何の用なんですか？　牧原に関係するこ
とってというのはわかりますけど」

釣り竿を軽く動かしながら尋ねてみる。

真面目な顔で聞いてみると、広田さんも表情を引き締めて、

「藤倉様は、本当にお嬢様の友人になるおつもりですか？」

そんな問いを、投げかけてきた。

その問いに何の意味があるのか、俺にはわからない。

俺はその問いに、視線を空へと向ける。

「本当に、ですか……困ったなあ」

いや困った。

本当に友人になるのかって？

「困る……ですか？」

何かを見極めるような、広田さんの視線。
その視線を受けて、俺はなおさら困る。

「困りますよ。だって……」

視線を空から戻す。

「牧原のことは、すでに友達だと思っていますから」

そう言っ、俺は釣り竿を引く。

ウキが動いていたが、魚はかかっていなかった。

「すでにお嬢様の友人、と申されますか」

「俺はそのつもりですけどね。ま、そういうのは押し付けるわけにもいかないですし、牧原次第ですけど」

「ふむ……全てはお嬢様次第ですか」

「そういうことですよ。一方通行の友情なんて、空しいだけですからね」

告げて苦笑する。

今の俺も、十分に一方通行かもしれない。

そんなことを考えていると、広田さんがふっと表情を和らげた。

「一方通行の友情は空しいだけ、ですか。中々含蓄深い言葉ですな」

「いえいえ、ただの持論です」

自分の台詞が少し恥ずかしかったから、頬を掻いてみる。

「……そうですね、貴方様ならば良いかもしれません」

そんな俺を見ながら、広田さんがポツリと呟く。

「良いつて、何がですか？」

俺は照れ笑いを止めて、再度表情を引き締めた。

そうやって表情を引き締めた俺に対し、広田さんは苦笑めいた笑みを浮かべる。

「なに、ただの昔話ですよ」

どことなく悲しげな顔で、そう言った。

第八話 昔語り

「昔話、ですか」

俺は広田さんの言葉に頷きつつ、軽く頭を働かせる。

桃太郎、金太郎、浦島太郎。

そんな単語が頭を掠めるけれど、きっとそれは違うだろう。

「はい。ただの昔話……いえ、昔と言うほどではないですが」

そう言つて、広田さんは口を閉じる。

そうして一度だけ深呼吸をすると、ゆっくりと口を開いた。

「事の発端、とても申しましょうか……今から話すことは、四年程前のことです」

語る広田さんの視線がどこを見ているのか、俺にはわからない。

ただ、その四年前のこととやらを良く思つてないのだけは雰囲気
でわかる。

「お嬢様は、その当時中学一年生でございました。通っていた中学校も、今の香南学園とは違い、男女共学。しかし、その中学校に通うのは一般の方ではありませんでした」

「一般の人じゃないって、どういうことですか？」

俺は釣り竿を軽く振りながら尋ねた。

まあ、予想としては牧原と同じような家柄の人間が通う学校といったところだが。

「その学校に通う方々は、大抵親が企業を興しております」

「つまりは御曹司とか、そういう類の人間ってことですか？」

「左様でございます」

予想が当たっていたことに、内心でため息を吐く。

ならば、考えられることなんてほとんど限られていた。

「えーっと、もしかして牧原が原因で権力闘争が起きたとか？」

「はははっ、飛躍していますなあ」

俺の言葉に軽く笑うが、その表情は冴えない。

「その一歩手前、と言ったところです」

「一歩手前、ね」

意外と近かったな、と呟く。

そんな俺を見た広田さんは、苦いものを含んだように笑った。

「ではここで問題を出しましょう」

「……問題ですか？」

唐突な言葉に、俺はオウム返しに言葉を返す。

「ええ、問題です。そうですね……あるところに少年がいました。

仮にA君と名付けましょう。そのA君は学校に通っていますが、クラスの中でも目立った存在ではありません。さて、どうすればそのA君は目立つことができるでしょうか？」

「授業中に、突然奇声を上げて踊りだす」

「それは目立つでしょうな。別の意味で」

冗談に笑うでもなく、広田さんは淡々と答えてくれる。その様子に、俺はふざけるのを止めて軽く考え込んだ。

「…… A君の性格は？ それと、そのクラスには他に目立つ奴がいたんですか？」

「A君はどこにでもいるような人間と思ってください。そして、そのクラスには目立つ方がおります」

「それは何人？」

「数人です。そして、特に目立つ方が一人」

「その一番目立つ奴より目立つ必要はあるんですか？」

「ありません。いえ、そもそもその人より目立つのは無理です」

情報を提示され、俺は考えをまとめていく。

さっきの冗談で言ったことも目立つだろうが、この問いに対する答えには相応しくないように思う。

…… まあ、さっきの冗談が正解だったら限りなく嫌だが。

「さて、どうですか？」

問いかけてくる広田さんを見て思う。

今この状況で出す問題ならば、ほぼ確実に牧原が関係してくる。

この場合、牧原はA君。もしくは一番目立つ人間だと考えるのが妥当だろう。

なら、話は簡単だ。

「その一番目立つ奴と仲良くなればいい。もしも一番親しい人間になれば、周りも注目する」

おそらく、これが正解だと思う。

朱に交われれば赤くなるというわけではないが、一番目立つ人間と

一緒にいれば、相応に目立つ。

俺の言葉に納得してくれたのか、広田さんは頷いてくれた。

「その通りです。一番目立つ人間と親しくなれば良い」

正解だったことに軽く息を吐くが、それに何の意味があるのだろうか。

俺は息を吐いたついでに口を開く。

「それで、その話と牧原に何の関係が？」

ちよいちよいと竿を引きながら尋ねると、広田さんも水面に目を向けた。

僅かに見えた横顔は、やはり、何か苦いものを含んでいるように見える。

「その一番目立つ人間が、お嬢様……そう言えばわかりますか？」

「へえー、牧原って人気者なんですね」

「人気者、と呼べるのでしょうか」

俺の言葉に対し、広田さんのため息は深く暗い。

「“牧原”という名前がもたらしたものは、人気と呼べるものではありません」

「というത്？」

「羨望や憧憬。そんな感情ならばまだ良いというものの、嫉妬や警戒。お嬢様を利用しようとする者、排斥しようとする者、取り入ろうとする者。実に様々でした」

「……………」

社会の嫌な裏側というやつだろうか。

四年前……中学一年のときからそんな話に巻き込まれるのは御免被りたい。

そんな俺を尻目に、広田さんの話は続いていく。

「本当に、色々な方がいたようです。お嬢様に対してゴマを擦り、言葉巧みに近寄る。表面だけは友好的に振る舞い、裏では貶める。中には牧原の内情を知ろうとした者もありました」

「なんとまあ……まるで社会の縮図ですね」

「ははは、それはそうですとも。その歳で会社の経営に関わることもありますからな。言うなれば学校は社交場。将来のライバル企業を少しでも減らしたいというのが本音と言えるでしょうな」

「または友好関係を築いておく、ですか。それも友情とかそういう意味じゃなくて、もっと経済的な、結託するという意味で」

「その通りでございます」

成程と頷いてみる。

正直、俺の理解できる範囲ギリギリだ。

そんな、プチ権力争いに参戦する体力もなければ気力もない。

「俺としては、友情って意味で友好関係を築きたいところですね」

「お嬢様とですか？」

「もちろん」

俺の言葉に、広田さんは一拍の間を取る。

「それは、何のために？」

「え？」

「お嬢様と親しくなればメリットがあるからですか？」

その問いは、きつと俺を試すものなのだろう。

牧村と親しくすればメリットがあるかと聞かれれば、頷かざるを得ない。

「そうですね。たしかに、牧村と親しくすれば俺にもメリットがあります」

「……ほう。そうですか」

僅かに、広田さんの片眉が動く。少々剣呑な雰囲気を感じるが、俺はそれに対して笑ってみせる。

「牧村が俺にくれるメリットっていうのはですね、“楽しさ”ですよ」

軽く釣り竿を繰りながらそう言うと、広田さんの表情が崩れた。少しばかり陰を秘めていた顔が、意表を突かれたように驚いているように見える。

「それは……どういう意味ですかな？」

意味を把握しきれていないのだろう。広田さんはそのままに尋ねてくる。

「そのままの意味です」

俺はそう答えて、少しばかりの欠伸をした。

「いやあ、田舎ってというのは案外退屈なものなんですよ。だから、誰か友達が一人でもいてくれれば、面白く過ごすることができるんですよ」

そんな俺の言葉に、広田さんは僅かに語気を強める。

「それが、貴方様にとってのメリットと？ 日本でも指折りの大企業、牧村グループの一人娘である美雪お嬢様がもたらすものは、その程度のモノで良いと言うのですか？」

「その程度のモノって……友達、仲間っていうのは大事だと思えますけど？ たしかに、俺も婆ちゃんから貰えるバイト代目当てでここに来ました」

けど、それだつて友達と遊ぶ金が欲しいからです。過ぎた財産は身を滅ぼしますし、金は人を変えとも言いますよね」

そこで一度言葉を切る。水面のウキを見るが、ピクリとも動いていない。

「広田さんが俺に何のメリットを求めたのかはわかりますが、気づかなかつたということにしておきます。たしかに牧村と仲良くなれば、そりゃ良い目が見れるでしょう。この前だつて、ラムネは俺がおごつてもらう立場になつたでしょうね。だけど、それは“つまらない”んです」

「つまらないとは？」

「んー……上手く言えないんですけど、俺が牧村の笑顔を初めて見たとき、ずいぶんと嘘臭い笑顔だな、と思つたんですね。あ、怒らないでくださいよ？」

注意を促してみるが、広田さんの表情に怒りはない。俺はそれを確認すると、話を続けていく。

「さっきの広田さんの話を聞けば、なんであんな風に作り笑いをしているのかも大体は想像できます。だけど、俺はそれが気に食わな

いんです。生まれついでの性分ですね、あんな風に笑われると、無性に笑わせてやりたくなるんです」

俺がそう言うと、広田さんは困ったように笑う。

「成程、それは困った性分ですな」

一つ頷き、俺は話を続ける。

「それにさつきも言いましたけど、牧村は俺を楽しませてくれます。今時炭酸飲料を知らない人間がいたことには驚きましたし、ラムネを飲ませようとすれば中身が吹き出します。それになにより……」

そこまで言って、俺は唇を吊り上げて笑う。

「アイツって、からかいがいがあるんですよ」

それと同時に、釣り竿を引く。竿先が引き込まれる感触に、魚がかかったことを理解した。

「……………」

かかった魚が暴れ、水面が波立つのを見ながら広田さんは深いため息を吐く。だが、そこに深刻な色はない。その証拠に、僅かな笑みを浮かべている。

「からかいがいがある、ですか……貴方様は、本当に困った性分をお持ちですな」

そう言って、広田さんは立ち上がった。ゆっくりとした動作で、

釣り竿を俺の傍に置く。そして、ほんの少しだけ寂しさの混ざった顔で尋ねてくる。

「もしも、今までに貴方様のような方がお嬢様の傍にいたのなら、お嬢様は本当に笑ってくれたと思いますか？」

その問いが、どんな答えを求めているのかはわからない。俺は竿を引きながら、軽く空を見上げた。

「さあ？ そんなのは、やってみないとわかりませんよ」

そう。そんなもの、やってみないことにはわからない。だけど、困ったことにそれは俺の性分に合わない。

俺はしなる釣り竿に目を向け、次いで再び水面へと視線を落とす。

「まあ、俺の場合は笑うのを待ちません。自分の手であいつを笑わせますからね」

それだけ告げて、俺は竿を引く。それに伴い、暴れていた魚が水面から姿を現した。それに慌てることなく、竿を操って魚を釣り上げる。

全長は先程吊り上げたフナよりも大きめで、色は黒に近い。

「鯉か」

「鯉ですな」

そして、先程と同じように会話を交わす。

広田さんは軽く笑うと、俺に一礼してくる。それに対し、俺は苦笑して吊り上げた鯉を見せた。

「良かったら、持って行きますか？ 鯉のあらいつてけっこう美味いんですよ。牧原に食わせてみたらビックリするでしょうし」

鯉って食べれたんですか！？ とか言いながら、驚く牧原の顔が思い浮かぶ。

「そうですな……それでは、いただくとします」

「作り方は？」

「はは、僭越ながら、お嬢様のお食事は全て私が作らせていただいております。だから、ご心配はいりません」

成程。見た目は立派な執事だが、中身もそれに伴うものだったか。俺はバケツに水を入れ、次いで鯉を入れる。すると、バケツにはやや不釣合いなサイズだった鯉が、苦しそうに水を弾いた。

「ほい、これで良しと。じゃあ、美味しいのを食わせてやってくださいよ」

「畏まりました。このバケツはどうしましょう？」

「うーん……まあ、気が向いたら返してほしいところですね。一応婆ちゃんの物なんです」

誰が返しに来る、とは言わない。広田さんもそこは承知なのか、軽く頷いてくれた。

「それでは、失礼いたします」

バケツ片手に歩き出す広田さん。うむ、執事風な男性がバケツを持って歩く様は微妙にシニールな光景だ。

俺は釣り竿を横に置き、後ろへと倒れこむ。丈の低い草がクツシヨンになってくれて、何気に気持ち良かった。

「ふあゝあ……まったく難儀な奴だね、牧原も」

広田さんの話を反芻し、大きく息を吐く。生憎と、俺は生まれつきの重圧なんて背負っちゃいない。だから、ああいった言葉が言える。

「さて、バケツは返ってくるかねえ？」

眼前に広がる青空を見ながら、苦笑した。
返ってこなかったらどうしようかな。
願わくば、そうならないことを祈る。

—— 広田 SIDE ——

「ふむ……」

藤倉様と離れたことを確認すると、私はバケツを地面に置く。そして、内ポケットに入れておいた携帯電話を取り出した。画面を見てみれば、

『通話時間 23分14秒』という表示。そして、それは今もカウントを続けている。

「もしもし、お嬢様」

携帯を耳に当て、電話越しにお嬢様へと声をかけた。だが、返事はない。ただ、僅かに押し殺したような声が聞こえるだけだ。

私はそつとため息を吐く。今の状態では判断し辛いが、おそらく

は良い方向に転がったのだと思う。

藤倉様の言ったことに嘘はないと思う。表情や声色を見ていたけれど、特におかしなところはなかった。だから、それはお嬢様を本当に友人と認めていてくれたということの肯定に他ならない。

「……もしもし、広田さん」

そうこうしているうちに、お嬢様の声が聞こえてくる。少し声が震えていたけれど、それを指摘するなんてことはしなかった。

「はい、なんでしょうか？」

「藤倉さんを、どう見ましたか？」

どう見たか、ですか。

「私の見たところ、嘘はついていないようでした」

からかいがいがあるとも言っていたけれど、それは友人間におけるスキンシップだろうから問題はない。

「絶対に信用できる、とは申しません。ですが、それに足るだけの人物ではある、と私は思いました」

「……………」

返ってくるのは沈黙だけ。しかし、おそらくお嬢様の気持ちは決まっているでしょう。

「広田さん」

「はい」

「鯉のあらい、というものは美味しいのでしょうか？」

その言葉に、私は安堵の息を吐いた。そして、大きく頷く。

「腕によりをかけて作らせていただきます」

電話越しのお嬢様が、私の答えに笑ってくれた気がした。

第八話 昔語り（後書き）

どうも、作者の池崎です。

このような拙作を読んでくださる方がいるかわかりませんが、更新が三ヶ月近く遅れてしまい、申し訳ありませんでした。

引越しをしたため、インターネットが繋がっておらず、更新することができませんでした。

真に申し訳ありません。

このような拙作ではありますが、今後ともお付き合いいただければ幸いです。

第九話 バケツと少女

「ふいふ……疲れるなあ、ったく」

額に流れる汗を拭いつつ、俺は愚痴をこぼす。真上から降り注ぐ殺人的な直射日光が、容赦なく俺の体力を奪っていく。

「曇らねえかな、そうすりゃ少しは楽なのに。あ、雨が降ってもいいか」

軽く祈ってみるが、俺は雨乞いなんてスキルは持ち合わせていない。そんな俺を嘲笑うかのように、日差しはきつくなるばかりだ。遠くからは蝉の大合唱が聞こえ、吹き付ける風はまったく涼しくない。温風熱風どちらの表現でも構わないが、すこぶる暑かった。

「ま、愚痴を言ってる暇があったら手を動かすとしますか」

大根の葉を片手でつかみ、一気に引き抜こうとする。だが、大根は抜けない。

今度は両手で大根の葉をつかみ、引き抜こうとする。だが、大根は抜けない。

「うーむ、どつかの昔話みたいだな」

気合を入れる。そして、大根の葉をつかんで思いつきり踏ん張った。

「ぬおおおお！ それでもカブは、抜けませーん！」

カブではない、大根である。

俺は背筋の限界に挑戦する気持ちで、大根を引く。掘ったら簡単に抜けるだろうが、それは駄目だ。一度チャレンジしたことを、途中で投げ出すのは美学に反する。まあ、そんなものはないが。

「ぬあつ!？」

思いつきり引いていると、大根が地面から引き抜かれる。それこそ、スポンツ、という擬音が似合うほどだ。

勢い余った俺はそのまま後ろへと回転する。ギリギリまでしなっていた竹が元に戻るかのように、俺の体も後ろへと投げ出された。

「一人バックドロップか！」

思わず叫ぶ。視界が回転し、引き抜いた大根が宙を舞う。俺は雲一つない空を見上げながら、後ろへと倒れこんだ。

「……ここがアスファルトの上だったら、俺死んでたな」

クッション代わりになった土に感謝しつつ、呟いてみる。衝撃はあったが痛みはない。そう判断して起き上がろうとすると、不意に影が差した。

「?」

それを疑問に思う暇もなく、頬を何かが掠める。その白い物体は、何やら重い音を立てながら地面へと突き刺さった。

「……………」

今までの汗とは違う、冷や汗が俺の額を伝い落ちる。俺は起き上がろうとした体勢のまま、頬を掠めた物体に目を向けた。

「だ、大根!？」

そこに刺さっていたのは、大根だった。おそらく俺がさつき投げてしまった物だろう。重量一、二キロはありそうな大根が、地面に刺さっている。もしも顔面に当たっていたらと思えば、冷や汗が流れるだけだ。

「やべえ、大根って人を殺せるんだな」

しみじみと呟く。もしや、放り投げた復讐ではあるまいか。

内心で謝り倒し、俺は今度こそはと体を起こす。太陽光で暖められた地面は、背中が痛くなるぐらい熱かった。

「ま、あと少しだし、頑張りますかね」

地面に植えられた何本かの大根を見て、俺は指の関節を鳴らす。野菜というのは、意外と侮れなかった。

収穫した野菜を運び、俺は一息吐く。日陰に入ると、今までの暑さがまるで嘘のように涼しかった。

扇風機が回っているわけではない。ましてやクーラーが効いているわけでもない。そんな上等な物は、この田舎には存在しなかった。だからこそ、自然の涼しさが心地良く、ありがたい。

俺は冷蔵庫から麦茶の入った入れ物を取り出し、コップも棚から拝借する。

麦茶を平面張力ギリギリまで注ぐと、それを一息にあおった。

「ぷはー。この一杯のために生きてるんだあー」

まるでオヤジである。ちなみに、飲んでいるのは純粹に麦茶だ。泡は出ない。

「炭酸だったらもっと美味しかったのになあ……」

少しばかり愚痴ってみるが、麦茶でも十分に美味しい。いや、例え水道水だろうが、疲れた体には美味しく感じられるだろう。

俺は何杯かの麦茶を摂取すると、日焼けで僅かに痛む腕を撫でた。いやいや、中々見事にローストされている。このまま一ヶ月ほど頑張れば、きっと皮膚癌になれるだろう。

そんな嫌な想像を浮かべ、すぐさま破棄する。ついで、日焼け止めは持ってきていたかを思い出し、ため息を吐いた。

「こんなに日差しがキツイってわかっていたんなら、絶対持つてきてたのにな……」

生憎と、駅前には売ってないだろう。蚊取り線香ならありそうだが。

俺は最後の一口と麦茶を飲み込み、視線を家の前の道へと移す。

「……ん？」

僅かに、人影が見えた気がした。

「んー……」

見間違いかともう一度見てみるが、どうやら見間違いではないらしい。黒の長髪をなびかせて、一人の少女が立っている。その姿を見て、俺はゆっくりと歩み寄っていく。

「よう、良い天気だな」

そして、軽く右手を上げてみた。すると、その少女——牧原は僅かに微笑んだ。

「そうですね。雲一つない、良いお天気です」

「俺としては曇ってるほうが良い……って、あれ？ 曇りのほうが紫外線キツいんだっけ？」

頭上で熱射線をばらまく太陽を見上げ、首を傾げる。たしか、曇りのほうが紫外線がキツかった気がした。

「けどまあ、それはどうでもいいか」

俺は笑いながら、牧原が持っている物に目を向ける。ソレは、俺が広田さんに渡しておいたバケツだった。そんな俺の視線を受けて、牧原がバケツを俺に差し出す。

「お返しますね」

「おう、サンキュ。んで、答えは？」

気軽に尋ねる。そっちのほうが、牧原も答えやすいだろうと思つて。

「……正直、まだ貴方のことを完全に信用したわけじゃありません」
「おや、これは手厳しい」

「だけど……」

俺の合いの手に反応せず、牧原が真っ直ぐな視線を向けてくる。

「信用、してみたいと思いました」

その表情はあまりに真剣で、

「ああ。信用しといて損はないぜ？」

俺は、思わず笑ってしまった。

「な、なんで笑うんですか!？」

そんな俺に、牧原が焦り半分怒り半分といった表情で文句を飛ばす。

「けどまあ、しょうがないだろ？ こっちだって嬉しいんだから俺は牧原と一緒に日陰へと移動し、受け取ったバケツを横に置く。そして、ついでに尋ねてみる。」

「牧原も麦茶飲むか？ バケツで」

「いいません!」

「いや、冗談だから。頷かれたら逆に困るんだけど」

“素”の表情で突っ込みを入れてくれた牧原に破顔しつつ、俺はもう一個コップを取ってくる。そしてコップを牧原に差し出した。

「えっと、なんですか？」

そう言いつつ。とりあえずといった風にコップを受け取る。俺は

牧原がコップをしっかりと握ったことを確認すると、麦茶を注いだ。

「んー……なんですかって聞かれると、ちょっと答え難いんだけど……」

俺のコップにも麦茶を注ぎ、目の高さに持ち上げる。

「ま、新しくできた『友達』に乾杯…… ってところかな？」

そう言っ、牧原のコップに自分のコップを当てる。グラスのよ
うに澄んだ音はしなかったが、今はこれで良いだろう。

……自分で言っ、てなんだが、少しばかり恥ずかしかったりする。
照れ隠しに頬を掻きつつ牧原の様子を窺ってみると、

「……う」

「っ！？」

なにやら、目に涙を溜めていらっしやった。

「いや、っ、て、おい。な、なんで泣く寸前五秒前ですか？」

焦る。思わず敬語になるくらい、とにかく焦る。女性の涙と泣いた
子供に勝てるはずがない。そんな例にも漏れず、俺だっ、て勝てな
い。

俺は若干オロオロしつつ、牧原が落ち着くのを待つ。俺としては、
この反応は予想外だった。

「っ、いえ、すみません…… っい」

っい、で泣かれても、主に俺の精神衛生上困る。それにもしも人

にでも見られてみる。俺が泣かしたと勘違いされること請け合いだ。

「あー、泣くな。頼む。泣かないでくれ。お前に泣かれると、俺まで悲しくなる……なんてことはないが、とにかく泣かないでくれ。どう反応すればいいか困る」

身振り手振り説得する。身振りも手振りも大した効果はないだろうが、やらないよりはマシだろう。

俺は、知らない人から見たら珍妙な踊りに見えそうな身振り手振りを加えつつ、牧原に「あーだこーだ」と話しかける。しかし、牧原は泣き止んでくれない。

生憎と、胸を貸してやるなんてキザったらしい真似はできなかった。そんなことをしたら死んでしまうだろう、俺が。そうだったきつと、死因は

恥ずかしさによる死亡、恥死となってしまう。だが、なんだその死因は。

「馬鹿だなあ……」

この状況でそんなことが思い浮かんだ俺に対するものか、それとも牧原に対して言ったのか、それは自分でもわからない。まあ、多分前者だ。

「わたし……馬鹿じゃない、です」

牧原が涙声で言い返してくる。どうやら、聞こえていたらしい。

「あーはいはい。お前は馬鹿じゃないとも」

おざなりに返し、ついでとばかりに軽く頭を叩く。知り合いの妹

にも同じようなことをしたことがあるが、全然気分が違うから不思議だ。

「適當、ですね……」

「すみませんねえ。こちらら、泣いてる女の子を簡単に泣き止ませるような手段を知らないもんで」

そもそも、女の子を泣かせたこと自体がない……わけではない。しかし、それに慣れるほど泣かせた覚えはなかった。

「とりあえず落ち着け。そうだな、深呼吸をしたら良いかもしれない。というわけで、大きく息を吸うんだ。そして吐け。それを繰り返せば、きっと落ち着くさ。というか、落ち着け」

最後は命令形で注文する。

俺も落ち着くべきだろう。というわけで、自分で言ったことを自分で行った。

大きく息を吸い、大きく吐き出す。それを何度か繰り返すと、大分落ち着いた気がする。

「よし、落ち着いた」

さわやかに汗を拭う。すると、そんな俺を見ていた牧原が小さく笑い声を上げた。

「本当に、おかしい人ですね」

「褒め言葉として受け取っとく」

流石に、頭がおかしいという意味ではないだろう、多分。
俺の表情からその考えがわかったのか、牧原は笑みを深くする。

だが、それだけだ。

「いや、そこは否定するなり肯定するなりしてくれ」

どちらかわからないじゃないか。

「肯定していいんですか？」

「すいませんやめてください。是非とも否定してください」

卑屈に謝って、二人で顔を見合わせて笑い合う。

そんな俺と牧原のすぐ傍では、蝉が楽しそうに鳴いていた。

第十話 田舎暮らし・その3

「んー……」

目の前に広がる光景を見ながら、俺は何度も目をこする。しかし、結果はいつも変わらない。目の前の光景は、嘘偽りない真実なのだから。

「藤倉さん。どうしたんですかー？」

俺に向かって手を振ってくる牧原。

いや、それは良い。別に大した問題じゃない。

何が問題かと言えば、牧原の服装が問題だった。

動きやすそうな薄目の長ズボンに、白のＴシャツ。手には軍手を装備し、頭にはいくつかの麦わら帽子をかぶっている。

まあなんだ。ＴシャツにＧパンの俺よりも、かなり合っているだろう。

——野菜を収穫するための服装としては。

「いや、ちょっと待て」

「はい？」

俺は右手を額に当て、左手で牧原を制す。

夏の日差しが眩しい炎天下の下、俺は今に至った理由を必死に思い出そうとする。

朝起きた。

いつも通りに婆ちゃんの手伝いをしていた。

牧原が来た。

よし、ここまでではOK。ただ、問題なのは牧原の服装だ。

「……その格好はなんだ？」

とりあえず聞いてみる。すると、牧原は笑顔で頷いた。

「広田さんが、農作業をするならこの格好が良いと言っていたんですが……変ですか？」

Tシャツの裾をつまみ、自分の格好を見下ろす牧原。それを見た俺は、なんとなく足元に生えていた人参を力任せに引き抜く。

「いやね、別に変ではないですよ？　ただ、なんでその格好でここに来たのかなー、なんて思っただけですよ、ええ」

意味もなく敬語で喋る。だが、牧原はそんな俺に構わず笑顔で頷いた。

「藤倉さんのお手伝いをするためです」

花が咲いたように微笑む。

あーなるほどねー。俺の手伝いをしてくれるんだー。だからそんな格好なんだー。

「いや、何故に？」

頭の中をクエスチョンマークが飛び交う。

昨日、あ後はそんなこと一言も言っていない。日が暮れるまで一緒に色々と話してはいたけれど、俺が手伝ってほしいとも、手伝いに行くとも聞いてなかったはずだ。

すると、牧原は少し照れたように下を向く。

「いえ……本当は藤倉さんと遊ぼうと思ったんですけど、広田さんが『藤倉様は昼間の間は農作業の手伝いをしているのです』と言っていたから、それならわたしも手伝おうって思っただけです」

さきほど引き抜いた人参を弄びつつ、俺は言われたことを整理した。

牧原は俺と遊ぼうとした。だが、俺は農作業をしている。なら、その農作業を手伝おう。

そして、結論に達した牧原が本当に来てしまった、と。

「というわけで、お手伝いさせてください」

どこか楽しそうに言ってくる牧原。俺はそんな牧原を見て、小さく笑った。

「断る」

一刀両断に告げる。

「えっ！？ な、なんでですか？」

断られるとは思っていなかったのだろう、牧原は驚いたように俺を見た。俺はその視線を受けながら、相好を崩して肩を竦める。

「すまん、冗談だ。そのリアクションが見たかっただけなんだ。許せ」

正直に言えば、猫の手も借りたい……ほど忙しいわけではない。

しかし、楽しそうにしている牧原を見たら、つい冗談を言いたくなっただけだ。

当の牧原はといえば、俺の台詞にむくれてそっぱを向いた。

「……藤倉さん、意地悪です」

「悪い。わざとだ」

とりあえず、引き抜いた人参をすでに収穫した野菜の場所へと置く。

しかし、あの広田さんは何を考えているのだろうか？ 仮にもお嬢様が畑仕事など、いや、仮と呼ぶには大富豪すぎるが。

俺は常に慇懃な執事の顔を思い浮かべ、軽く頭を振った。

「まあ、別にいいか」

深くは考えない。

広田さんのことだ。きっと、牧原のためになると思ってのことだろう。

そう判断して、なにやらやる気に満ち溢れた目をしている牧原を見る。

「それで、わたしは何をしたらいいんでしょうか？」

「あー……どうしようかねー」

周りを見るが、婆ちゃんはいない。俺に指示を出してから、どこかに行ってしまった。

「よし、それならトマトを収穫してくれ。きちんと熟れたやつをな。青いのは取るんじゃないぞ」

人参みたいに土中に埋まっているのは、一見ただけではわかりにくい。だが、トマトならば色で熟れているかがわかるから、牧原でも大丈夫だろう。

「わかりました」

俺の言葉に、楽しそうに頷く牧原。俺は近くに転がっていたカゴ手渡すと、人参の収穫に戻ることにする。

牧原は大丈夫だろう、多分……。

少しばかりの不安を胸に抱きつつ、俺は足元の人参に目を向けた。

牧原とのんびり雑談をしつつ、俺は人参を引き抜いていく。すでにその数は百を軽く超え、小高い山を築きつつあった。

「そんなにたくさん収穫して、どうするんですか？」

トマトを丁寧にもぎ取りながら、牧原が聞いてくる。

「いや、そりゃ売るに決まっているだろ。収穫したら、町のほうに持っていくんだよ。今年は野菜が高く売れるしな」

「持っていくって……徒歩でですか？」

素でそんなことを聞いてくる牧原に、俺は苦笑する。

コイツ、頭は良いくせにどこか抜けていやがる。

「徒歩か。ああ、そりゃすごいな。これを全部徒歩で持っていける体力があるのなら、フル馬拉ソンで世界記録を狙えるかもしれないぞ？」

持って行くのは人参だけではない。今牧原が収穫しているトマトなども持っていくのだ。

とてつもなく重いし、なにより大量の野菜を一人で運べるわけがない。自分の体積の何倍あるのだろうか？

「持っていくときはトラックだよ。他の家の人も町に持っていくがらな。それに便乗して持っていく」

俺の言葉に、牧原は感心したような声を漏らす。そんな牧原に、俺は手元のカゴを指差した。

「ほら、手が止まってるぞ。トマトと人参の収穫さえ終われば今日は自由だから、さっさと終わらせようぜ」

「あ、はい」

元気良く返事をして、牧原は再度トマトの収穫に戻る。俺はそれを横目で確認すると、自分の仕事へと意識を集中した。

さて、これが終わったら何をして遊ぶかな、なんて最後に考えて。

麦茶がなみなみと注がれたコップを手に持ち、俺は一気に飲み干す。そして、おおげさに息を吐いた。

「ぶはあー、うめえ」

農作業も終わり、いつも通りに麦茶を飲む。その傍らには、同じようにコップを持つ牧原も一緒だ。

「美味しそうに飲みますねー」

「ああ。俺はこの一杯のために生きてるんだ」

酒に溺れたおっさんのようなことを言いながら、俺は空になったコップに再度麦茶を注ぎ足した。

「そうなんですか……藤倉さんって、この一杯のために生きてるんですね」

牧原は手に持ったコップに視線を落とし、何やら俺と麦茶を交互に見交わす。そして、おずおずとコップを俺に差し出した。

「よろしければ、わたしのもどうぞ」

「ごめん、ストップ、待て。何かすごい勘違いをしてそうだから言っておく。麦茶のために生きてるっていうのはもちろん嘘だぞ?」

苦笑を浮かべてそう言うが、牧原の目を見て俺は笑いが凍りつく。

「え……嘘、なんですか?」

マジだった。本気と書いてマジと読むくらい、牧原は本当に俺の言葉を信じていたらしい。愕然という言葉が似合う表情を顔に貼り付け、牧原が俺を見てくる。

「ちょ、なんでそんな罪悪感が沸く顔をするんだよ!? やめろつて! そんな目で俺を見ないでくれ! 土下座で謝りたくなってきただろ!」

そう言いつつ、正座する俺。

イカン。体が勝手に土下座しようとする。お代官様に対する平民

の如く平伏してしまいそうだ。

俺が葛藤していると、ようやく牧原は反応を返してくれた。

「やだなあ……冗談ですよ？」

「目を逸らしながら言っても説得力ないけどな」

とりあえず、地面に手をついて謝っておきましたとも。

休憩が終わった俺と牧原は、とりあえず田舎道を歩いていった。当
てなどなく、時折会話を交わしながらのんびりと歩いていく。
そんな道の途中で、遠くから元気の良い声が聞こえた。

「おにごっこするひとこのゆびとまれ！」

子ども独特の高い声。そして、その声に群がるように聞こえる幾
人かの笑い声。

そちらに目を向けてみれば、こじんまりとした学校らしき建物が
あった。

こういった田舎では小学校と中学校が一緒になっていることもあ
るが、あの学校もその類だろうか？

「藤倉さん？」

俺の様子を見て取った牧原が、小さく首をかしげる。そんな牧原
に対して、俺は少し考え込んでから笑いかけた。

「今日の予定が決まったな」

そう言つて、俺は学校へと歩き出す。

「え？ 予定が決まつたつて、何をするんですか？」

歩き出した俺に、不思議そうながらついてくる牧原。

なんというか……ピヨピヨコについてくるその姿は、親ガモについてくる子ガモみたいで可愛い。おかしい意味でなく。

「何をするかつて？」

幸いにして、現在の牧原の服装は長ズボンに白のＴシャツ。それに麦わら帽子をかぶっている。

うん。運動するには実に丁度良い服装だ。いつも着ているようなお嬢様チックな服じゃないから、汚れを気にする必要もない。

「おにごっこするひとこのゆびとまれ！」

再度聞こえる子どもの声。俺はそちらを指差し、

「ほら、おにごっこする人って言ってるだろ？」

そう言つて笑いかけた。

第十話 田舎暮らし・その3（後書き）

お久しぶりです。いつの間にやら300日近く更新が止まってました。読んでくれた方には申し訳ないです（いるのかどうか不安ですが）。

チマチマながら更新していきたいと思いますので、お付き合いいただければ幸いです。

第十一話 おにごっこ

「おにごっこするひとこのゆびとまれ！」

腕白小僧っぽい少年が、元気良く叫んでいる。その周りには、学年は違えど小学生らしき子どもが群れていた。

「おにごっこするひとこのゆびとまれ！」

ハイ、ハイ、なんて声を上げながら、少年の指につかまる他の少年少女達。そんな頭上から、俺は手を伸ばした。

「とーまった」

とりあえず返事をしながら、一番上にあった少年の指をつかむ。その瞬間、空気が凍った。

少年少女は、突然の闖入者に硬直する。

それは仕方ないだろう。何せ、突然高校生がおにごっこに参加しようとしてきたのだから。

「えっと……おにいさん、誰？」

腕白小僧っぽい少年が、怖々聞いてくる。だから、俺は答えた。

「君らの声に誘われて、遙か遠い銀河の彼方からここまでやってきたんだ」

もちろん嘘だ。

「えっ、マジで？ おにいさんって宇宙人なの？ グレイタイプ？」

だが、田舎の少年は実に純粹らしい。しかし、さりとグレイタイプなんて単語が出る辺り、この少年タダモノではないかもしれん。俺は田舎っ子も侮れねえと内心呟きつつ、首を横に振った。

「いや。俺はな、三分間だけだがこの地上で活動できるタイプの宇宙人なんだ……」

「ウル。ラマン！？ うわ、すっげー！」

「すごいだろ？ さて、それじゃあおにごっこしようか。何せおにいさんには三分間しか時間がないからな……」
「と、ほら、牧原もこっち来いよ」

遠くで俺の様子を窺っていた牧原が、ゆっくりとこっちに近づいてくる。

「藤倉さんって宇宙人だったんですか？」

……なにやらキラキラとした目で見てやがりますよ。

「ちょっと待てや。子どもの心を解きほぐそうとしたお茶目な冗談だっつーの」

そもそも、『自分宇宙人なんですー』なんて本気で言った日には、可哀想な目で見られるか、もしくは黄色い救急車が飛んでくるに違いない。

俺がそんなことを考えていると、事の成り行きを見ていた他の少年が牧原を指差して叫んだ。

「あー！ ラムネのねえちゃんだー！！」

ラムネ？

一瞬疑問符が頭を掠めるが、少年は言葉を続ける。

「このねえちゃん、ラムネ飲もうとして失敗して、顔中にラムネまみれになったんだぜー」

あー、そういえばいたな。『わー、あの姉ちゃん馬鹿でー』なんて言ってた子どもが。

牧原を見てみれば、恥ずかしいのか顔を赤くしている。

「きつと不器用なんだよー」

そんな牧原を見た女の子は擁護するように口を挟む。男の子はからかうとするあたり、やはり男女の差を感じた。そしてもちろん、俺はからかう側だ。

「よし、これからはラムネのねえちゃんって呼ぼうぜ」

イキイキとした輝くような笑顔で提案してみる。

「ちょ、ちよつと藤倉さん！？」

俺の提案に焦る牧原。うん、そのオドオドした表情はナイスだ。俺の提案にすぐさま男子組は賛成の声を上げる。

「よし、それじゃあラムネのねえちゃんも一緒に鬼ごっこしようぜー」

「そうだね。ラムネのねえちゃんも一緒に鬼ごっこしよう」

「ラムネのねえちゃんじゃないです！ わたしには牧原美雪という

名前が」

「おいおいラムネのねえちゃん、小学生の言い出したことに怒るなよ。大人げないぞ?」

「名付けて煽ったのは藤倉さんですよ!？」

プンスカと言わんばかりの表情で牧原が頬を膨らませた。あまりからかうと、怒るのではなく拗ねてしまいそうなので折衷案を出すことにする。

「じゃあラムネちゃんはどうだ? 可愛いだろ?」

「あんまり変わってないです!」

「え、そうか? ラムネちゃんって可愛い名前だと思わない?」

牧原がすごい勢いで拒否するので、俺は試しに一緒に遊んでいた女の子に聞いてみる。

「ラムネちゃん……うん、かわいいと思う」

少し思案して、女の子が頷く。それを見た俺は、勝ち誇るように胸を張った。

「可愛いってよ、ラムネちゃん。俺も可愛いと思うぜ?」

「か、可愛いですか? その、本当ですか?」

すると、牧原は少し顔を赤くして上目遣いをしながら聞いてくる。少し意味合いが違うように聞こえたが、俺は気にせず頷いた。

「じゃあ、ラムネちゃんです。広田さんにもそう呼ぶようお願いして……」

「すみません牧原さん。俺が悪かったんでそれは止めてもらえませ

んかね？　というか止めてください」

腰を九十度に折って頭を下げる俺。

もし広田さんに知られたら、笑顔で怒られる気がする。いや、それだけじゃすまないような気も……。

牧原グループのお嬢さんに『牧原ラムネです』なんて名乗られたら、名付け親の俺は社会的、物理的にこの世からフェードアウトさせられる気がしてならない。

「え？　でも、可愛いじゃないですか」

可愛らしく小首を傾げる牧原。数秒前まで正反対の意見を述べていたとは思えないほどの変貌振りだ。ビデオに撮ってたら是非とも見せてやりたい。

意見を翻した牧原は、何故か俺の背後に視線を向ける。

「広田さんもそう思いますよね？」

そして、そんな意味不明なことを言った。

何で広田さんが？　という疑問を浮かべようとした瞬間、俺の両肩が“誰か”に握られる。

「可愛いとは思いますが、お嬢様がそう呼ばれるのは些か不都合がありますなあ……」

「あ、あの、広田さん？　微妙に肩が痛いんですけど？　というか、今までいませんでしたよね？」

握られた肩口に微妙に食い込む指先が痛い。そんな俺を見ながら、広田さんは朗らかに笑う。

「はっはっは。困りますな、藤倉様。お嬢様に珍妙な名を付けられては」

「冗談です、お茶目なジョークです。だから、この肩を握る岩のようにゴツい手をどけてほしいんですが」

俺の肩を鷲づかみにして笑う広田さんにすぐさま謝り、開放してくれるようお願いする。すると広田さんはもう一度笑ってから手を離してくれた。正直、思い切り握り締められたら両肩の骨がやばかった気がする。

子供達は新たに現れた広田さんを見て、何やらキラキラとした目をしていた。

「おじちゃんもおにごっこする？」

その中の一人が広田さんにそう話しかけ、俺は思わず脱力する。小学生と高校生と執事らしい中年の男性によるおにごっこ。それは、傍から見ればさぞ奇妙な光景に映るだろう。そもそも広田さんがそんなことに付き合うわけではないと俺は高をくくり、

「面白そうですね……やりましょう」

「って、やるんですか!？」

広田さんからの返答に自分の耳を疑った。

おかしいな。耳かきは割とよくするほうだから、聞き間違っことなんてないと思っていたのに……。

そんなことを呟きながら自分の耳を軽く叩く。うん、正常だ。そうやって耳の調子を疑う俺に、広田さんが朗らかに笑いかける。

「たまには童心に戻るのも良いものかと思いましてな」

「はあ……広田さんが良いって言うのなら俺は別に構いませんけど」

「では、最初の鬼役は私がやりましょう。逃げる時間は一分ほどでよろしいですか？ 何か特別なルールはありますか？」

そう言つて黒の上着を脱ぐ広田さん。意外とノリノリらしい。そんな広田さんの言葉を聞いた一番年上らしき少年は、楽しそうに笑いながら口を開く。

「鬼は最初の子が逃げる時間に目をつぶること。逃げて良い範囲はこの学校の敷地内だけ。

あ、もちろん校舎の中はなしね。子は捕まったらスタート地点に移動してゲーム終了まで待機。子は逃げても良いけど、どこかに隠れていてもいいよ」

「なるほど。おにごつことくれんぼを混ぜたルールというわけですね」

童心に返るというのは本当なのか、広田さんの表情はいつもより穏やかである。しかし、この夏場に長袖のスーツを着ていて汗一つかいていないのはどういうことだろうか？

もしかしたら広田さんは、『心頭滅却すれば火もまた涼し』というまいち信じられない格言の体現者なのかもしれない。

俺はポケットに入れていた携帯や財布を抜き取って木陰に置きつつ、そんなことを考える。財布はともかく、走っている最中に携帯を落としたら洒落にならない。これほど長閑な土地ならば盗まれることもないだろうし。

「それでは始めますか」

広田さんの口から、開始が告げられる。それを聞いた俺や牧原、小学生の子ども達は一斉に駆け出した。

さて、おにごっこである。

おにごっこことは逃げた子を捕まえる鬼役と、鬼から逃げる子の役を模した遊びだ。逃げる子の運動能力やルール次第では鬼が絶対にクリアできない地獄の耐久ゲームという側面を持つが、誰でも幼少の頃に一度はやったことのある遊びだと思う。

ゲームという室内遊戯が発展している昨今、最近の子どもはあまりしないのかもしれないが、こういったシンプルで体を動かす遊びは中々に楽しい。もちろん、俺は小学生が相手だった場合は十分に加減するが、相手はあの広田さんだ。隠れても良いというルールがある以上、馬鹿正直にスタート地点から見える範囲にいる理由はない。

その上で、鬼から見つけられにくい場所に隠れる。ついでに鬼の動きを確認できれば良いのだが、その条件を満たすのは高い場所だが、高い場所に隠れると見つかった時に逃げにくい。さすがに屋根の上に登るわけにもいかないし、一分では登れそうになかった。

というわけで、俺は現在校庭の隅にある草むらに身を潜めている。俺の腰ほどの高さがあり、伏せていればそうそう見つかるものではない。その上、こちらからは鬼の様子を窺うことも楽だ。難点は蚊が寄ってきそうなことだが、そんなものは我慢する。

「くっくくく、最後まで逃げ切つてやる」

なんとなく悪役のように笑い、そろそろカウントを終えそうな広田さんの様子を窺う。しかし、そこで俺は思わず脱力した。

「……あいつは何をしているんだ？」

思わずそんなことを呟いてしまう。そんな俺の視線の先では、牧

原“らしき”人物が隠れていた。いや、あれを隠れているというのはいささか褒めすぎだろう。何せ、『頭隠して尻隠さず』を素でやっているのだ。

牧原が隠れる場所を選んだのは、スタート地点からそこまで離れていない場所にある体育用具を入れるプレハブ小屋である。二つ並べて建てられたプレハブ小屋の丁度中間にある隙間。そこに入り込んで隠れた気になっているらしいが、隠れきれていなかった。何せ隙間から足がはみ出ており、余程目が悪くない限り見落とすことはないだろう。

牧原が一体どんな結論を持ってそこに隠れようと思ったのかわからないが、何故鬼が振り返った先に隠れようと思ったのか。もしかしたら近距離から見れば意外とわからないものなのだろうか。それとも牧原には気配を消すというとんでもない特技があるのだろうか。もしくは牧原が現在着ている服は、近距離からだて視界に映らない光学迷彩チックなものなのだろうか。

そんなことを考えているうちに、広田さんのカウントが終わった。そして目を開け、振り返ってから僅かな苦笑と共に真っ直ぐ牧原のもとへと歩いていく。

「はい一人確保。ん？ 何か言ってるな？ 『なんでわかったんですか？』って言ってるのか？」

どうやら牧原の中では完璧に隠れていたらしい。時折思うが、どうやら彼女は重度の天然かもしれない。気を張っているときはともかく、こういう気兼ねする必要がないときにはかなり抜けているのだ。

俺は肩を落としてシヨンボリした顔でスタート地点に向かう牧原に苦笑すると、広田さんの動向に気を配る。そうやって苦笑しているうちにも、すでに二人捕まっていた。

「……待て、それなんて早業？」

いつの間に見つけて捕まえたのか。俺が牧原のほうを見ていた時間はそう長くない。だというのに、広田さんは次々と少年少女を捕まえていく。

「うむむ、これは逃げる準備をするべきかね」

距離は五十メートルほど離れているが、今のうちに移動したほうが良いかもしれない。そろそろ俺を除けば全員捕まったはずだ。

だから今のうちに、と考えた瞬間、

「え？」

広田さんと目が合った——そんな、気がした。

いや、気のせいだろう。ここまで距離があつて、なおかつ草むらに隠れている人間を見つけるなんていくら目が良くても無理だろう。だが、そう考える俺の不安を煽るように広田さんがこちらへと歩いてくる。

「どう見てもロックオンされてますね、はい」

俺は歩いてくる広田さんの目を見た瞬間、すぐさま逃げを選択した。なんかもう、やばいのである。

「命の危険を感じるっての！」

それは、獲物を前にした狩人の目だった。

俺は草むらから這い出し、クラウチングスタート同然に地を蹴って走り出す。それでも運動能力には自信がある。陸上部の短距離選

手や馬鹿げた運動能力を持つ従兄弟^{いとこ}には勝てないが、それらを除けばクラスでも指折りだ。

そうやって走り出す俺を見たのか、広田さんも地面を蹴る。だがこれだけの距離があればまだどこかに隠れることができるだろう。そんな“樂觀”を、俺はしていた。

「ちょー！？ 速いって！？」

グングンと距離を縮めてくる広田さんの姿に、俺は思わず叫ぶ。短距離を走る上で最適と思われるそのフォーム。それが叩き出す速度は、明らかに俺よりも速い。一步の加速は俺よりも大きく、始めにあったアドバンテージは急速になくなっていく。運動場を縦断するように走り抜ける俺と、それを追走する広田さん。頑張れー、と声を上げる少年少女^{ギャラリ}。

そんな応援の声に押されること十数秒。俺は背後に圧迫感を感じて肩越しに振り返る。

「草木の中に身を潜めるのは中々良い着眼点ですが、人の肌というのは存外に目立つもの。特にこういった天気の良い日には皮膚が反射をしますからな。顔に保護色になる物を塗っていないのならば、見つけるのは容易いですぞ」

五メートル背後から追走してくる広田さんが、まるで講義をするようにそんなことを言ってきた。

正直、怖い。何が怖いかというと、話している内容が怖いのだ。何故そんなことをさも当たり前のように言うのか。それを考えると怖すぎる。ついでに、息一つ乱していないところも恐ろしい。

あと十秒も逃げ切れないだろう。恐怖が半分を占めた思考がそんな結論を示し、それでも俺は逃げようと必死にもがく。

「おや？」

一気に進行方向を変えた俺に対して、背後の広田さんがそんな声を出した。頼むから少しは息切れをしてほしい。そんな些細な願いをしながら、俺は低学年向けの鉄棒へと直進する。

そこから二メートルほど離れた先には俺の身長と同じぐらいの高さの壁があり、おそらくその向こうには逃げ道があるだろう。この恐怖から逃げるには、壁を乗り越えるしかない。だが、普通に乗り越えようとしても広田さんに捕まる。

「とうっ！」

だから俺は、勢いそのままに腰ほどの高さの鉄棒へと跳躍して足場にすると、そこから更に跳ぶ。足を踏み外したら笑えない事態になっただろうが、幸い成功だ。そのまま壁の上に右手をつき、足から着地できるようにとなんとか壁を乗り越え、

「はい？」

眼下に広がる一面の水……プールが俺を出迎えてくれた。

「のおおおおおお！？」

水面へとダイブする俺。そして上がる水柱。さすがに溺れるほど深くはないが、それでもいきなり水に落ちれば当然慌てる。

「ぷはあっ！」

すぐさま水中から顔を出し、顔についた水滴を手で拭う。水の温

度は温いくらいだが、もしも今が冬だったら洒落にならなかっただろう。携帯も身につけていなくて良かった。

「大丈夫ですか？」

そんな俺に差し出される誰かの手。プールサイドから差し出されたその手を見た俺は、特に気を払うことなくその手をつかむ。

「え？ ああ、大丈夫です……あ」

顔を上げて、思わず俺は間抜けな声を出す。

「これで全員捕まりましたな」

そこには、苦笑しながら俺を引き上げる広田さんの姿があった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4849b/>

あの日見上げた青空に

2010年10月10日11時16分発行